
女神さま おちた

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神さま おちた

【Nコード】

N0153S

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

私は哀れな女です。

右も左もわからない世界に落とされて告げられてしまいました。
世界を救う、女神になれと。

ようこそ、女神殿

私は、憐れな女です。

右も左もわからない。そんな異世界に連れてこられ、女神として役目を果たせと告げられました。

ふざけんな。

沢渡繭は、握っている鉛筆を持ったまま、自分の周りをぐるりと取り囲んでいる老若男女に視線を巡らせた。

そうして、改めて自分の手の中の鉛筆を見遣る。

うん、起きてる。

座り込んでいる石床の冷たさも、じめじめとした暗い部屋　―
おそらく地下なのだろう　―の圧迫感も、決して夢じゃない。

それを確認してから、一団の中からおもむろに進み出た男を見つめる。

黒髪の男だった。

まっすぐな髪はゆったりと背中を伝い、その身は真っ黒なマント、真っ黒な上衣、真っ黒な袴、真っ黒な長靴に包まれている。唯一の色と言えば腰帯に身につけた淡く黄金に輝く糖蜜色の宝石と、繭を容赦なく睥睨する青い冷やかな瞳だった。

その顔は、驚くほど整っている。すらりとした鼻筋といい、薄い唇といい、誰かが掘り出した彫刻か精巧な人形かと言われれば、繭は信じただろう。

その人形めいた男が静かに唇を開いた。

「ようこそ。女神殿」

腹にまで威圧を与えるような透る声は、低かった。

陛下はお忙しい方でございます

彼らの国は、東にある。

巨大な大陸には東西南北の四つの大国があり、その中の一つだといふ。

彼らは元は同じ人種ながら異なる文化を持ち、それぞれの意識を持って暮らしている。

だから、考え方の違う彼らは一様に争った。

和平と戦争を繰り返し繰り返し、そうして何年も経った頃、また和平条約が結ばれた。それは前代未聞の四国による条約だ。

それを成したのが東の王だったという。

しかし、一時とはいえ和平に導いた王が死んだ。

それを皮切りに二十年続いた平和は終わりを告げ、小競り合いはあえなく再開され、十年経って現在に至る。

「マユさま」

咎めるようにこちらを見据えた官服の男に向かって、繭はわざとらしいほどの勢いで文句を言った。

「それで、いつ陛下にお会いできるの？ ねえ？」

「……今、陛下は執務中でございます。それに、あなた様も歴史を学んでおられる最中でございますし？」

確かに歴史は好きだ。繭はそれをおくびにも出さないうぶーぶーと文句を続ける。

「だあってえ、もう飽きちゃったんだもん」

こちらの文化は、繭の居た日本に驚くほどよく似ている。

目の前の家庭教師の男が来ている服は平安時代の貴族のようであるし、働いている女官たちは着物姿だ。上級貴族の女性になると、薄い衣を重ねた着物を身に着けていて、その姿は中国の姫君のようだった。

繭も彼女らのように長いひだと宝石のついた豪華な衣装を身につけている。

「午後からは佐久の姫様たちと御茶会をするのよ。陛下もお呼びできないかしら？」

繭付きの女官によって奇麗に化粧を施された顔にニッコリとわざとらしい笑顔を乗せる。

爪も足も体も二十人から居る女官たちによって毎日エステされ、半年も経った今では常にピカピカだ。

家庭教師の男　　「訊けば、彼は立派な官職についている大臣だそうだが　　」は迷惑そうに眉をひそめたものの、それを繭と同じくおくびにも出さずに申し訳なさそうに言う。

「陛下はお忙しい方でございます。マユさまの御言付けだけは御耳に入れておきましょう」

言葉は慇懃だが彼の瞳は物語る。

忙しいから邪魔するな小娘！

全くもってその通りだと繭は思う。

彼、羅心だつてこんな小娘の家庭教師などしている暇などないはずだ。聞いた話では、彼は王様の右腕として非常に有名な能吏らしいのだ。すらつとした長身に貴色である赤の官服はよく似合っているし、顔だつて悪くない。官帽にまとめた髪は金髪、切れ長の瞳は灰色　　文化は日本とよく似ているが、彼らの髪や瞳の色は実に様々だ　　に貴族のお嬢様たちはきやあきやあ黄色い声を上げている。

そんなエリートな彼が何を悲しくてどこの馬の骨ともしれない繭の家庭教師をして貴重な時間を使わなくてはならないのだ。

だから、繭は全くわからなかった言葉を理解するために出来るだけ他人と喋ることにしたし、文字も必死で覚えた。

異世界から王宮に召喚された女神ということもあって、悪く接し

てくる人はほとんど居なかったし、心証の元々悪かった人は今では
繭に近寄ろうともしない。

世話になってている彼の名前は当然憶えているが、繭はわざと忘れ
たことにして微笑んだ。

「絶対陛下にお伝えしてね。宰相さま」

私は仕事で忙しい

家庭教師を丸めこみ、貴族のお嬢様たちの噂話に耳を傾けて、お茶を飲んでいると、王宮の内情がわかってくる。

羅心が王様に繭のことを告げ口しているのは百も承知だし、まさかあの鉄面皮がこんな御茶会にのこのこ出てくるとも思っていない。そんな王様がまた良いのだというお嬢様たちが、今の繭の取り巻きだった。

彼女たちは女神さまに取り入って、まだ年若い王に目をかけてもらおうという貴族のお嬢様の中でもツワモノ達だ。

あの大臣はこうだ、どこそこの若君はこうだ、そんな噂話から、この王宮は一部の大臣と王様派に分かれていることが分かった。

それから、繭を召喚したのが、王様ではなく、その大臣たちだということも分かった。

不承不承、呼び出してしまったものは仕方ないと女神を受け入れた王様は、二十人という女官を繭に付け、豪華な部屋をあてがい、豪華な貴族のような生活をさせた。

何の事だかわからないうちに女神さまとかしずかれ、無理矢理お役目を告げられた。

国の安泰のために、我が国の王との婚姻を。

「陛下。どうして今日は御茶会においで下さらなかったのですか？」
仏頂面で対面する陛下に、にっこりと言ってやる。

対する王様は涼しい顔で繭に顔を向けずに煮物に箸をつける。

「私は仕事で忙しい。あなたの相手をしている暇などない」

低い声でそれだけ言うと、王様は黙々と食事に戻る。

毎日夕食だけ、王様と繭は二人で摂る。

それは大臣たちが仕組んだことでもあったし、繭にとっても都合

が良かった。

「そんなことはどうでも良いではありませんか」

そう言うと、周囲で控えていた人間が低く溜息をつくのがわかった。

彼らは、全く役に立たない女神に愛想をつかしているのだ。

しょうがないお嬢様ですね

ここへ連れてこられた初めこそしおらしくしていた繭だったが、様子がだんだんわかってくると、様々なわがままを言ってみた。

美味しい食事が食べたいだの。

きれいな着物が着たいだの。

豪華な部屋に住みたいだのと。

言葉が分かってくるようになると、この国のこともわかってきた。王様は若いながら善政を保っているし、戦争続きの大陸においても、頭のいい王様の国らしく小競り合いは圧倒的に少ない。

繭を召喚したことは、まったくの余計なお節介だったのだ。

今日も陛下には相手にされず、散々他人に馬鹿にされながら案内された部屋に入ると繭はどしんと椅子に座り込む。昼間だったら絶対にやらない。

「つつつつつかれたつつつつ!!!」

思い切り大声を出すと、繭は猫のように凝り固まった体を大きく伸ばして、今度はだらーんと四肢を投げだす。

この部屋には女官もいない。

必ず人払いをするし、この部屋の主が他人が入るのを良しとしなからだ。そんな人を寄せ付けない部屋には、所狭しと本棚が延々と並んでいて、繭が居る机と椅子はほんの隅っこに置かれているだけだ。

机に置かれたランプの明かりが頼りなくなるほど、夜のこの部屋は不気味に光りを飲み込んでいく。

だが、その分、繭が誰かに見とがめられることが少なくなるといふものだ。しかし、本棚の奥からぽおつと明かりが浮き出たかと思うと、

「誰かに見られたらどうなさるのですか」

手燭を持って、官服の男が暗がりから現れた。

年のころは三十を過ぎているだろう。官位はあまり高くない深緑色の服で、髪は黒いし、目立ったところは何も無い。人畜無害な穏やかな顔しているが、

「明即だから、まあいいや」

繭がそういうと、紫の瞳がすうと猫のように開く。

その双眸は誰より酷薄だった。

「しょうがないお嬢様ですね」

元の穏やかな顔に戻ると、男、明即は言うことを聞かない困った娘を見るように苦笑した。

彼は、繭を呼び出した大臣に言われて彼女を監視している見張り役だ。

普段はこの誰が使うともしれない書庫番をし、裏では大臣の密命を受けて暗躍している、らしい。

のんびりとした顔からは想像もつかないことを、あっさりと言ったのけたこの男は、きっと誰より頭がいいに違いない。少なくとも雇い主の大臣よりも。

「今日はいかがでした？」

「もー最悪！」

彼は、繭の計画を見抜いたのだ。

繭が、役立たずな女神を演じていることを。

あなたにやっていただくことができました

「こんなびらびらの服きて豪華な食事なんてお腹壊しそー」

実際、この世界にきて初めて今日のような山海珍味を食べたとき、繭はお腹を壊した。

だけど、表面上は冷や汗を流しながら美味しく食べたふりをした。繭の愚痴を面白そうに聞いている明即は、繭の小さな異常に気がついた。

繭がやっていたことは本当に小さなことだ。

従順で、綺麗なものが好きで、頭が悪くて、そして女神さまと奉られていることに少しだけ優越感を感じている女の子。

そういうどこにでもいそうな女の子のふりをしていただけだ。

実際、繭はそれほど性格がひねてもいけないし、頭は良くないが、少なくとも右も左もわからない場所でヒロインごっこをしていたとは思わなかった。

それに、すでに言われているのだ。

あなたはもう帰れない。

そう、はつきりと、明即は繭のことを見抜いたときに告げた。

特別な力がないことは、周囲が感じている以上に、繭自身が知っている。

特別美しいわけでも、頭が良いわけでも、特殊な力があるわけでも、不思議な魅力があるわけでもない。言葉も文字もわからない女神がどこにいる。

繭は、長い黒髪の、ただの十七歳だった。

さらに言えば、やせっぽちのくせに背だけはどの女の子よりも高い。牛乳は嫌いだったのに、背だけは伸びたのだ。

「綺麗な着物、美味しい食べ物、かしく人々。そんなものに囲まれて、この世の果てでも見てきたように詰まらないと言うあなたはどんな王国から出てきたお姫さまなんでしょうね？」

明即はその表情がうかがえない笑顔で繭の隣にのんびりと腰かけて、椅子の隣の机に行燈を置いた。

「ねえ」

「はい」

「それって楽しい？」

綺麗な服を着て、美味しい食べ物食べて、みんなにちやほやされて。

一日だけなら憧れる。けれど、それがずっと続くとなると。

「何の心配もないって、それに甘えていいものなの？」

かしずかれる度に繭は思うのだ。

一口美味しいご飯を食べる度に、繭は自分の未来を考える。

「何も考えなくていいって言うのなら、私って、ここに飼われてるって言わない？」

繭の言葉に、明即は少しだけ瞳を向けた。

暗い紫の双眸に自分の姿を見て、繭は息をつく。

この人だけが、本当の繭を見てくれている気がする。

取り柄もなくて、ただ不安な子供の繭を。

じつと見つめていると、明即の方が視線をそらせた。

けれど、その横顔は少しばかり微笑んでいるような気もする。い

や、この男はいつでも仮面を張り付けたような笑顔を絶やさないのだけれど。

繭が不思議に見つめて何も言わないでいると、明即はぽつりと書庫の暗がりに向かって呟いた。

「もしも、ここが飽きたなら、私があなただを連れ出して差し上げますよ」

明即の言葉を、繭が切実に頼ることになったのは、それから五日後のことだった。

「あなたに、やっていただくことができました」

昼間、絶対に呼ばれないはずの繭が執務室に呼ばれたと思ったら、王様の隣に立った羅心が無表情に告げてきた。

「嫁いでいただきます」

繭は叫び出したい衝動を押さえこむのに必死で、思わずいつものようなバカみたいな笑顔を忘れた。

わかりました

羅心の説明は明瞭かつ簡単だった。

先の戦で功績を上げた地方の領主が褒美に繭を、と申し上げ、王はそれを承諾した、ということだったが、繭はちゃんと理解した。

要は、せっかく召喚した女神だけど、金ばかりかかって爪の先ほども役に立たなくて困っていたところ、体裁のいい厄介払い先が出来た。国の外に放り出すわけにもいかないから、ここはひとつ、のしをつけて世間知らずの地方のならず者に押し付けてしまおう、というわけだ。

羅心は宰相らしく、繭にその領主がいかに勇猛果敢でよくその土地を治めているかを語り聞かせていたが、繭は半分聞いて、表向きには半分も聞いていないふりを決め込んだ。

どこへ放り出されようと、とうとう繭は厄介払いされるわけなのだから。

繭は羅心の話を聞きながら、執務机で政務に励む黒髪の王様を見た。

出会ってこのかた、この鉄面皮が顔色を変えたところなどついぞ見ることができないでいる。

それだけが心残りといえれば心残りだった。どうせなら思い切り驚く顔が見てみたい。

けれどもそれは繭が唐突に女神さまのように美人になることのように無理難題に思えた。

大体、この王様は繭がこの部屋に来てから、一言も話しかけようともしないのだ。頭の悪い繭に話しかけるだけ無駄と思っているのだろう。馬鹿馬鹿しいのはお互い様だ。

どのみち、この何でも持っている王様が繭の気持ちを理解するなど到底不可能なのだ。

いきなり異世界に呼び出されて、さあこの世界のために働けと言

われて誰が言うことを聞くだろう。

美味しい料理と綺麗な寝床と着物を用意されて、さあ責任を果たせと言われてどうすればいい。

繭にしてみれば、あの世で味わうはずだった楽園生活を生きていくうちに体験したようなものだ。それも三日で飽きてしまったのだけれど。

（ここで私、死ぬのかなあ…）

ぼんやりと思った。

十七歳の繭にとって、死はメディアの中の物だった。

だから、こうしてひしひしと迫る命の危機をあまり実感できないでいた。

きつと、ここで逃げだせば繭は殺される。

死に物狂いで逃げだしても、繭は野たれ死ぬだろう。

羅心の解説はまだ続いていたが、繭はのんびりと笑ってやった。

「わかりました」

遮られた羅心は不快そうにあからさまに眉をひそめたが、いつものようにそんなことを繭は気にしてやらない。

「短い間でしたがお世話になりました。陛下、羅心さま。何のお礼もできませんが、役立たずの私が居なくなることで御恩返しとさせていただきます。ありがとうございます」

いつもの間延びした口調をやめて、はっきりと王様と羅心に礼を取った。袖の中で手を組んで軽く膝を折るのだ。これはしつこく礼儀作法の先生から言われてもやらなかったこちらの世界の礼の取り方。

顔を上げると、驚いたことに王様と羅心が呆気に取られている。

思わぬ成果に繭は細く笑んで、執務室を後にした。

警備の兵士に挨拶して、渡り廊下を歩くと肩から荷物が落ちていくようだった。

繭はスキップしたい気分を抑えて、自分の部屋へ戻らなければならなかった。これも今までにないことだ。今までは宮殿は迷うから、

と必ず誰かに何処に行くにもついてきてもらっていた。けれど、ちよつと頭の悪い子のふりもこれでおしまいだ。

これからどんな目に遭うか、どんな領主に嫁がされるのかは二の次だった。

自分でいられる時間を取り戻すチャンスなのだから。

本当のあなたさまのことを王様がお知りになろうともしないことが悔しいのです

繭は自分の部屋へ戻ると、さっそく行動を始めた。

まずは部屋で常駐している二十人からいる女官を追い出した。

彼女たちは不平不満を表に出さず、今までよく仕えてくれた。だから精一杯の労いの言葉と給金の引き上げなどを言いつけた女官長への言付けを渡してやったら、あっさりと出ていった。こういうときは、プライドの高い人間というものは扱いやすいらしい。彼らはきちんと評価さえ下せば、思い通りに働いてくれる。

それから自分の部屋を物色することにした。

繭のわがままで（ということになっている。実際は押し付けられた）送られてきた豪華な髪飾りや着物は、お金にはなるかもしれないが、持っていくことはできない。これは国のお金で賄われているものだ。繭よりふさわしい人のために使われればいい。

頭の良くない繭だって、伊達に優秀な宰相殿のお勉強を教えるもらっていたわけではない。

彼に学んだことを全て覚えているわけではないが、この世界におけるあらゆる知識を与えてもらった。素晴らしいことだ。

聞き流していた羅心の話によれば、繭が王宮から追い出されるのは、なんと二日後。この世界での嫁入りに最短でも一週間は準備期間があることを思えば、相当なスピード婚だ。しかもその物好きな領主さまの土地は首都から遠く離れた辺境も辺境。国境にもほど近い南概というド田舎だ。

繭は私室から女官がすっかり居なくなったことを確認してから、自分用の衣装箆笥を引っくり返して服と靴を取り出した。今着ている上等な着物とは比べものにならないほど質素なものだ。裾のひらひらしたズボンに似た丈の短い着物。これは、下っ端の下女に金を渡して揃えてもらったものだ。

いくら役に立たない女神さまをやっていたとはいえ、繭も遊んで

ばかりだったわけではない。

羅心のお勉強の時間、貴族のお嬢様たちのお茶の時間、そういう時間以外は特別やることもない繭には自由時間だ。だからその合間に、下女の仕事をやっていた。

掃除に洗濯、色事以外の力仕事も含まれる小間使いだ。最初のうちはベソをかくほど怒られていたが、今ではどこへ出しても恥ずかしくないかと太鼓判を押されるようにまでなった。

飾り気はまったくないが、何枚かの着物と靴は繭が働いた給金で買ったもので、幾らかの貯金とこれらは繭自身の僅かばかりの財産だった。

大切な財産を風呂敷に包んで、繭は再び衣装箆笥の底に仕舞いこむ。それから、一人私室を出た。

繭が住んでいるのは客人用の離宮だ。この庭先を挟んで後宮があり、その近くに下つ端下女のための使用人棟がある。

繭は新緑のすがすがしい庭を突っ切って、使用人棟へ向かう。そして小枝で窓を叩くのだ。それから後宮に近い庭木の茂みに隠れていると、一人の女官がやってくる。

びくびくと辺りを用心深く見渡した彼女は、繭の顔を見て礼をとった。

「いかなさいました。マユさま」

怯えるように繭をうかがう目は小動物のようで、華奢な彼女は女官服にも敬礼にも未だ慣れていない。

「あのね、私、南概に嫁ぐことになったの。今まで良くしてくれてありがとう。小菊」

そう言って、繭は長い袂から手の平大の包みを取り出し、小菊に手渡す。

その重みに彼女の顔は綻んだ。

可愛い顔をしているが、彼女は金が大好きだ。彼女に渡した金は繭の小遣いとして渡されている金だが、こうして小菊に渡すなら、悪いことに使ったわけでもない。

だから、繭は小菊の綻んだ顔を見て胸をなでおろしたが、次の瞬間、小菊の顔は渋面になってしまった。

「……大丈夫なのですか？」

一見彼女の顔は繭を心配しているようにも見えるが、

「どうしたの？ 金づるが居なくなるのがそんなに不満？」

小菊は、繭が散々無理を言っただけの下女の仕事を紹介してもらったりとかかなりの危ない橋を渡らせた。繭は小菊の遠い親戚だと偽って下女になったが、それがばれるようなことになれば小菊もただでは済まない。

しかし、小菊は渋面を崩さず、首を横に振った。

繭はわざとらしく小首をかしげてみせた。彼女には、繭が興味本位で下女の仕事をしたいと告げてある。まさか情報収集だとは言いくらかったのだ。貴族たちの噂は御茶会でお嬢様たちから、そして市井に近い噂はこの下女や下男たちから得た。

「……本当のあなたさまのことを、王様がお知りになるうともしいことが悔しいのです」

小菊は唇を噛むような顔で繭を見つめるが、繭にはその意味が分からなかった。王様が繭のことを知ろうとしないのは当たり前だ。だって繭に見せるつもりがないのだから。

けれど、小菊はなおも首を横に振った。

「本当のあなたを知らねば、きっと王様は御妃にと望みました」

そんなことはあり得ない。

繭は答える言葉を呑みこんだ。

小菊に驚いたのだ。

本当の繭を知っているのは、明即だけだと思っていた。

一緒に働いている下女でさえ、繭のことは少し頭は悪いが真面目な娘だと思っている。

小菊の、茶色い丸い目を見つめた。

何かを確信しているような眼だ。

繭は、腹を決めて自分に頷いた。彼女は信じよう。

「この国の王様はいい王様だね」

「ここから近い、後宮はひっそりとしている。未だ妃や妾がないのだ。」

お嬢様たちによると、王が二十三という年齢で、後宮に誰もいないという事は珍しいのだそうだ。いくら年若いとはいえ、その年になると妾の一人も抱えている。だから、お嬢様たちは寵愛を得ようと必死だ。

けれど、王様を間近で見ている繭には、王様の事情も知っている。彼はいい王様だ。人の意見をよく聞いて、自分で判断して、女官から下女に至るまで目立つた悪評がほとんどない。彼は実にマメに執務をこなしている。それも昼夜問わず黙々と。ここ最近では繭が召喚されるきっかけにもなった少し大きな戦があった。その事後処理が圧して、それまで着々と進められていたお后探しが出来なくなっているらしい。

(たぶん、それは口実なんだろうけれど)

王様自身がまだ後宮に女性を入れようという気がないというのが一番だ。

それに、

「でも、私、王様苦手なんだ」

地位も名誉も何でも持つてる王様だ。好きになれば、何でも出来るし、何でも与えてくれるだろう。ただし、それは王様が飽きるまでだ。

繭はそういう愛を良しとはできない性質だし、好きではない。

言い切った繭を小菊は残念そうに見ていたが、やがて「お元気で」と笑ってくれた。

思えば、繭は彼女と話すことが好きだったのだ。

名残惜しさもあつたが、繭は後宮のそばを抜けて次の目的地に向かった。

もしも。

もしも繭が手に入れることができるのなら。

それは、きつと形のないものだ。

離宮の隣にほとんど官吏も立ち寄らない場所がある。

静かなそこは、繭も普段であれば夜にならないと近寄らない。

「明即！」

ずらりと並んだ書架。

繭の秘密の逃げ場所、書庫だ。

古い書物ばかりを集めているらしく、用がある者自体が少ない。

こつりと靴の足音を聞きつけて振り返ると、知らない男が立っていた。

明即と同じ官服だが、寝ぼけたような顔に眼鏡をかけている。

「明即でしたら、もうここにはおりませんよ」

本日付けでここを去りました。

男の言葉に繭は書庫の埃を思いきり吸いこんでしまった。

うそつき。

ここがつまらなくなったら、連れ出してくれるって言ったのに。

乗り出されては危のうございませす

素直に嫁いでやるつもりはなかった。

だから、繭は羅心に頷いたのだ。

二日後に連れていかれると聞いたから、急いで準備した。
なのに。

唯一の頼みの綱が、煙のように消えてしまつては。

夜逃げしてやるつもりで準備した荷物を女官が用意した衣装箱の底に押し込んだ。

繭は飾り気のない着物を選んで着たが、手伝いを遠慮したというのに最後だからと女官たちに押し切られてしまった。着物を着せられ、淡く化粧を施され、最後にベールを頭に乘せられたのだ。

いつもよりも幾分動きやすい格好なので、護衛だという兵士に衣装箱を運ぶのを手伝ってもらい、自分でもお気に入りのシヨールと羅心にもらつた筆記用具を持った。

離宮の出入り口で女官長を始めとした繭を世話してくれた女官たちが居並び、深々と頭を下げている。

こうまでされては逃げるに逃げられない。

呆れるような、溜息をつきたいような気分を押し殺して、繭も女官たちに頭を下げた。

「今までありがとうございます」

繭が言うと、何故か女官長が複雑そうな顔で見上げてくる。

「本当によろしいのですか。何も、お持ちになられず」

彼女が言いたいのは、繭に贈られた着物や宝石のことだろう。

「私には過ぎたものですので、お世話になつたみなさんへの饞別にそれが許されないのでしたら、国庫へお返しく下さい」

はつきりとした繭の声に戸惑つたのか、女官長は言うべき言葉を呑みこむように頭を再び下げてしまった。

「どうぞ、ご健勝であられますよう、我ら一同願っております」
これからのことを考えると、繭は頭痛がするような思いだったが、入口の目の前で止められた繭が乗るのである。馬車を見て思わず深く息を吐いた。

どのみちに逃げることなど許されないのか。

繭は胃の中が冷えていくような心持ちで、兵士に促されるまま馬車へと乗り込んだ。

離宮から王宮の外へ出るまでに、長い回廊が続く。

思えば、繭はこれまで王宮の外へと出たことがない。

これが最初で最後のことになるのだろうか、気落ちして見ておかないのは損だ。

繭はそう考えて馬車の窓を開けた。

見知った場所や知らない場所が交互に駆け抜けていく。

幸い今日は晴れていて、馬車も思っていたより反動がない。クッションも用意されていて、長い旅に耐える造りのようだ。

繭は誰も見ていないことをいいことに、クッションを抱えて馬車の椅子に座り込みながら景色を楽しむことに決めて、のんびりと窓から入り込む風を受ける。

そろそろ王宮の外へさしかかる頃に、王様の執務室が見えた。

結局、この日まで王様は忙しいらしくいつもの夕食にも顔を見せなかった。

言付けに来た羅心は女官長と同じような、複雑そうな顔で繭へ謝罪を口にしたが、彼も繭を見送りに来なかった。

今となっては、どうでもいいことだ。

王宮の外に出ると、活気ある街が広がっている。

建物は昔の日本や中国に似ていて、街行く人々の格好もそれに似ている。

彼らは馬車上の繭を物珍しげに眺めていたが、繭にしても街の様子子が珍しくて思わず身を乗り出すほどだった。しかし、

「失礼」

二人ついてくるといふ護衛のうち、一人が馬車の窓から乗り出していた繭の前に馬で並んでついてきた。

甲冑姿のいかにもな格好だが、ひさしの下から覗く顔は穏やかな男だ。

「あまり乗り出されては危のうございます。お控えください」

繭に窓を閉めて、窓のそばにしているカーテンを引けという。

有無を言わせない言葉に、繭は思い切り顔をしかめたが、彼が一向に退こうとはしないのであきらめて言うう通りに閉めた。わざと音を出して閉めてやったが。

別に嫌われようが構わない。山の奥に置いて行かれたり、どこかに売り飛ばされたりするのは勘弁してほしいのだが。

そう考えると少し不安になってカーテンの裾から窓を覗く。

すると、まだ居たらしい護衛と目が合った。

繭は呻く前に驚いたような顔をした護衛を残して馬車の中へと引っ込んだ。

これで子供だと思われたらしく、繭はしばらく小さな子供のよう
に扱われることになってしまった。

カラじゃないよ

「この丘を越えれば南概ですよ。姫さん」

馬を休ませるための小休止に、馬に水をやっていた繭に護衛の一人が面倒臭そうに言った。

慶諾というこの男は、護衛の甲冑を外して軍服らしい着物をだらしなく着崩していて、なんと水色の髪をしている。彼は眠そうな顔で繭から馬へやっていた水の袋をひったくる。

何をするのかと繭が見上げると、彼は親指で馬車を指さした。

「朋来が呼んでいます」

「私、何もしてないわよ」

「そうですね。夜中に宿を抜けだしたり、馬に乗ろうとしたり、俺が目を放した隙に馬車を抜けだして買い食いしたり、最近はしてないですね」

慶諾の言葉に繭がぐっと詰まると、彼は馬車へ行けと命令した。渋々従いながら、繭は口を尖らせる。

別に、悪いことをしようと思っただけではなかった。

ただ、歓楽街が有名だという街に出れば、その出店が気になっただし、思ったよりも可愛げのある馬が気になってまるで乗ってもいいと言うようだったから乗ろうと秘密で努力してみだし、ただ宿に連れて行かれるだけの毎日が飽きたからだ。

今、繭は王宮を出てきたようなひらひらした着物ではない。旅が二週間も三週間もかかると聞いて、衣装箱から自前の衣装を出したのだ。それを着て部屋を出てきたときには、朋来と慶諾に小間使いと勘違いされた。それもいいかと街へ出かけようとしたのは、結局捕まってしまったが。

「マユさま」

馬車の前で繭の衣装箱を開けているのは朋来だ。女性の衣装箱を開けるなど教わらなかったのだろうか。

しかし、繭は怒るよりも驚いた。この、朋来という優しい銀髪の男は繭を叱りつける時でさえ、笑顔を絶やさないう奇妙な男だ。それが、今は悪鬼羅刹もかくやというほどのしかめ面。

「どうしたの。朋来」

「それは、こちらがお伺いしたいことですよ」

朋来は憤りを隠そうともしないまま、繭へと向きなおる。

「なぜ、衣装箱の中が空なのですか」

「カラじゃないよ」

なんだそんなことかと繭は肩を竦めたが、朋来の機嫌は治らない。仕方なく繭も自分の衣装箱を覗き込む。

上等ないい香りのする大きな箱だ。房のついた取っ手で開けると、繭の大事な物が入っている。

自分で買った着物と靴、それから大きな風呂敷。これはどうでもいいが、王宮を出る時に着ていた上等な着物に上等なベール。それから羅心から貰った筆記用具の入った箱と帳面。

それから、一週間前に立ち寄った街で、朋来と慶諾にねだって買ってもらった髪飾りがある。

それを見て、繭は小さく笑んだ。

「……なぜ、何も入っていないのです」

怒っていたはずの朋来が、今度はなぜか泣きそうに見える。

「だって、私の荷物はこれだけだもの」

きつと、最初に持った時には分からなかったのだろう。箱はそれ自体が丈夫で重い。普通に箱がいっぱいであれば、本当は男一人で持てるようなものではないのだ。

「王から下賜された宝石や、着物はいかなさったのです」

「いらぬよ。あんなもの」

だいたい、あれは繭がもらったものではない。借りていたものだ。なんてことを、と朋来は呟いて、大きな手で自分の顔を覆ってしまった。

「衣装箱が軽いことには気付いていました」

朋来は苦しげに吐きだして、繭を見つめる。

「けれど、仮にも嫁がせるといふのに、花嫁衣装も持たせないなんて、どうかしています」

この国での婚礼には、たくさんの準備が必要だ。

それは家であつたり、家具であつたり、多岐に及ぶが、それは花婿が用意するものだ。花嫁側が用意するのは、たった一つ。花嫁衣装だ。これは送り出す側の礼儀でもあるし、花嫁への饒別の意味もある。親がいない娘にさえ、勤め先の上司や近所の世話役が用意する。

豪華であつても、質素であつても、たとえ望まれない花嫁であつても、それを欠くのは忌むべきことらしい。

繭に話して聞かせる朋来の方が、今にも泣きだしてしまいそうだ。元々、繭は何も望んでいない。

帰る望みも、逃げる望みも、すでに失われている。

何が良くて、何が悪いのか。

繭にはそんなことは、本当は分からない。

ただ、目の前のことに驚いたり、喜んだりするだけだ。

「いいんだよ」

小さな鳥が花をくわえているモチーフの髪飾り。繭が自分で買つても良かったが、これを買つてしまうと手持ちが心もとなくなってしまう。どうしても欲しい。露店の前で悩んでいた繭に、朋来と慶諾がぼんと買つてくれた。その頃には、たびたび抜け出す繭に辟易して、二人が繭の散歩に付き合うようになっていた。

「お嫁さん、これみたいなベールつけるんでしょう？ 着せられてた着物は淡い色だし、これつければごまかせるよ」

繭がベールと着物を順番に指指して、最後に髪飾りを髪に添えてみせると、朋来は泣き笑いの顔になった。

嬉しかった。

年の離れたお兄さんに可愛がられているようで。

改めて着せられた着物を見て、繭は「あ」と思う。だから、女官

のお姉さんたちは繭にこの衣裳を選んでくれたのだ。花嫁衣装も持たせられない繭を憐れんで。

「ね、朋来」

だから安心してよ。

そういうように繭が笑うと、大きな手が繭の頭に乗った。

見上げると、慶諾が珍しく目を細めて、痛むような微笑みを浮かべている。

ありがとう。

繭は声にならない言葉の代わりに、精一杯微笑んだ。

幸せにしますよ

丘を下る前に、繭はいつもの少年のような装いから、仮初の花嫁衣装に身を包んだ。

たくさんの人に惜しんでもらった。

何もわからない、知らない繭にたくさんの人が良くしてくれた。だから、それで充分だ。

南概という土地は、広い。

どんな荒地かと思えば、繭の目の前に広がったのは広大な牧草地のんびりと家畜が草を食み、農夫たちが脇の畑で作業をしている。

そんな田舎道を抜けると、石畳に舗装された街が開ける。

どちらかというところ、西洋風の石造りの建物が立ち並び、街の奥には城塞らしい高い塀が見える。

繭は街に入る前に窓を閉めてカーテンを引いてしまったので、街の様子はうかがい知ることはできなかつたが、馬の蹄の音と共に、時折活気のある人のざわめきが聞こえた。

羅心がよく土地を治める領主だと言っていたのは伊達ではないらしい。

しばらく馬車を進め、繭が外から朋来に声をかけられてカーテンを開けると、すでに城の車止めの辺りだった。

薄暗い城塞の車止めに馬と、馬車を止め、繭は朋来の手を借りて馬車を降りる。

いつもなら繭が一人で飛び降りるのに。そう思うと繭は今の状況が少し恥ずかしくなった。

けれど、そんなことを吹き飛ばすように、顔をあげて驚いた。

「お待ちいたしておりました。マユさま」

薄暗い出入り口に官服に良く似た着物の老人が立っている。その先には、ずらりと女も男も、肩の凝りそうな礼をとったまま待ち構

えているのだ。繭は思わず引き返したくなって、朋来の外套の端を握った。

けれど、いつもであれば甘やかしてくれる朋来は笑顔はいつものままに、甘やかすように繭を老人の前へと連れていく。

繭は困惑のまま老人に挨拶すると、彼はまるで神様にでも会ったような面持ちで繭に頭を下げてしまった。

「この日をまことに嬉しく存じます。この爺、どれほど待ちわびたことか」

思いもよらない歓迎に複雑な心境のまま、繭は城の中へと招き入れられた。

城の中はどこも天井が高く、王宮とはまた違う。王宮は繭にも親しみやすい木の家屋が多かったが、ここはほとんどが石造りで武骨だ。しかし内装は柔らかな色合いに整えられていて、過ごしやすいようにも見えた。

ところどころにある箆笥や椅子が瀟洒で、思わず触ってみたくなるようなものばかりだったからかもしれない。

繭は老人に連れられ、礼をとってはいるが興味津津に繭を眺める人々の間を抜けてそれほど遠くない明るい部屋へと招かれた。一面がガラス張りのその部屋は、車止めの薄暗さが嘘のように明るく、窓の外には温かな光を浴びた庭が広がっている。部屋にはソファにサイドテーブルといった、西洋風のものばかり。そういえば、戸口は古めかしいドアだ。

「朋来と慶諾は？」

「あの者たちは部屋の前にて待機させてあります」

暗に、この部屋から出ないよう告げて、老人は部屋から辞していた。

何でも来い、ととうとうここまで来てしまった。

けれど、と繭は今更ながらに不安になった。

いくら羅心が誉めるような統治者でも、繭としては二の次だ。

年は若いのか。少なくとも年上だろうが不細工だろうが、ハゲと

デブは嫌だ。でも、デブは痩せさせればいいし、ハゲは見慣れれば可愛く見えないこともない。ただ、繭を望んだというのだから、優しい人であればいいと思う。

「マユさま、お館さまがお見えになりました」

さきほど部屋を出ていった老人の声だ。

ドアノブが回る。

ハゲか、デブか。

繭はマナーの先生直伝の礼を取って頭を下げた。

誰かが、部屋へと入る気配がしたかと思えば、それはすぐに繭の前へとやってきた。

思っていたよりも若いのかもしれない。

繭は目の前の足先をじっと見つめた。

「顔を、上げなさい」

若い。

しかも低くてとても心地良い声。

繭は、恐る恐る視線を上げた。

造りのいい腰帯に剣を帯びてはいない。

仕立てのいい着物からはお日さまの匂いがする。今まで外に居たのだろうか。

それに繭より背が高い。それが分かったのは首元まで見上げた時。ようやく視線が顔に行きついて、繭は口を開けた。

「明即？」

薄い唇、白い顔。平凡だと思っていたのに、明るい光の元で見ると繭を見下ろす顔はひどく整っていることが分かった。官服ではない着物だから長かったらしい髪を肩口で緩く結わえている。そして、酷薄な紫の瞳を細めたかと思うと、嬉しそうに笑う。

「どうして？」

繭は確かに明即だった男を見つめながら、混乱する頭の中に振り回されていた。

どうして、ここに明即が居るのか。

どうして、彼がひどくあの男と似ているのか。

繭の混乱を面白がるように明即は笑い、「ああ」と肯いた。

「そうですよ。私は、この国の王、崇鵬によく似ているでしょう?」
似ている。

まるで、

「私は、あれの兄です」

いよいよ繭は声が出なくて、口をぱくぱくさせた。

それが面白いのか、明即は笑みを深める。

「要は、二重間諜というやつです」

王に敵対する大臣の懐に潜り込み、実は王へと情報を流していたという。

「けれど、まさかあなたのような方を召喚するとは思いませんでした」

そう言つて、明即は繭をソファへ座るように促した。

操り人形のようにソファへ座りこんでしまった繭の手を取つて、

明即は優しく微笑む。

「あなたには不幸以外の何物でもなかったでしょうが、そのお陰であなたと出会えたわけですけれどね」

私腹を肥やす大臣にも感謝しなくては、と明即はうそぶき、のんびりと目を閉じた。

「崇鵬とは腹違いの兄弟でしてね。あれは正妻、私は妾の子です。

だから、早々に継承権を放棄し、私はこの辺境の領地を賜り、田舎領主として表向きは暮らしていました。弟が即位してからは、あれやこれやと中央では出来ない仕事を個人的に引き受けていたのがね」

その一環が、書庫での官吏と大臣の間諜だと。繭が怨みがましいような気分で見上げると、何故か嬉しそうな顔で明即は笑う。

「あれは、馬鹿でしょう?」

明即があれ、と呼ぶのは今のところ一人しか繭には思いつかない。どう答えたものと繭が口ごもると、明即は改めて「馬鹿で結構

なのですよ」と言った。

「実直で、真面目だけが取り柄の男ですからね。詰まらない男ですよ。このまま放っておけば、おそらく国を傾けることでしょう」

繭はぎよつとして明即を見た。彼はおや、と天気でも予想するよ
うな顔で続ける。

「あれはね、即位してから政敵への逆襲に関心を傾け過ぎていて、自分以外のほとんどは馬鹿だと思っているのですよ。だから、女神を召喚しようと言った大臣たちの目は節穴ではなかったというわけ
です」

ある意味で、国の危機だ。

誰かが言ってやらなければならぬ。

あなたの足元に、目を向けてはどうかと。

その役を、繭は知らない間に押し付けられていたらしい。

今更ながらに、背中が寒くなる。一步間違えれば、繭は不興を買
って殺されていた。

「でも召喚されたあなたは実にうまく自分の身を守った」

明即は繭の不安を覗き見るように、紫の瞳に繭を映す。

「けれど、あのままでは近いうちにあなたが厄介払いされることは
目に見えていました」

だから、明即は今までの功績を引きかえに、繭を引き取った。

でも、と繭は思う。

繭も、明即と同じ未来を見ていた。遠くない日に、繭はどこか遠
くの地へとやられるか、最悪死ぬことになるだろう。馬鹿な娘のふ
りをするに決めた時に、覚悟したことだ。

けれど、繭はまだ生きている。

これからは、明即の機嫌をうかがって生きなければならないのか。
そう思うと、気が重い。

「何か、思い違いをしていませんか」

長い指が繭の頬を撫でた。思わぬことに驚いて繭が顔を上げると、

笑っていない明即が居た。

「あなたは、厄介払いされたのですよ。あれに」

低い声に、繭は少し息を呑む。まさか、花嫁衣装も持たされていないことを明即が知っているとは思えない。思えないが、明即に関しては繭の知らないことは多過ぎる。

「そして、あなたは私の妻になる」

そんな話もあつたかもしれない。

「でも、それって口実でしょ？」

近い明即の顔に視線を彷徨わせながら、繭は自分のペースを掴もうと必死に口を動かした。

すると、明即はふっと笑ったかと思うと、突然繭の肩に額をつけて、

「あっはっはっはっはっは！」

「ちよつと！」

笑いだした明即を抗議のために繭が押しのとけると、明即は煩わしいとでも言うように繭のペールを取り払ってしまう。

「小賢しい真似を」

明即はペールをソファに投げだして吐き捨てるように言うので、
「返してよ！」

取り返そうと繭が身を乗り出すと、明即は繭を抱き締めることで押しとどめた。

繭と明即とは仲が良かったと思っている。

けれど、こんな風に密着することなど無かった。

触れても肩が触れ合う程度。手さえ繋いだことがないというのに。繭は思いがけない広くて硬い胸に驚いて、息を詰まらせた。

「あれは、本当に馬鹿だ。あなたを知らないなんて」

耳元でささやかれ、繭はびくりと肩を震わせる。そんな様子が気に入ったのか、明即は優しく、しかし頑として繭を自分の胸に抱きこんだ。

「本当はね、私なのですよ。あれの敵は」

睦言をささやくように、明即は繭の耳に思いもかけないことを注いで笑う。そんな彼が信じられなくて、繭は恥を忘れて明即を見つめる。

「少し前に、戦が起こったことをご存じですね。あれは大臣が敵国と結んで行ったのですがね、その橋渡しは私がやりました。こんな国、いつそ滅んでしまえばいいと思っていましたね」

嫌気が差していたという。

妾であることを嘆いて死んだ母にも、彼女を疎んで最期には寄せ付けもしなかった父王にも、その父にそっくりな、他人の心に疎い弟にも。

「弟は私のこんな正体に薄々気付いているのでしよう。先の戦では酷い前線に送られましてね。生き延びて帰ったら予想以上に驚かれましたよ」

自領に帰れば今度は何をしでかすか分からない。だから、大臣を監視するという名目で書庫に留め置かれた。

「でも、あなたに出会った」

明即は、嘘か本当かわからないいつもの笑顔で繭を見つめる。

「あなた、自分がどれだけ可愛いかわらないでしょう？」
知るわけがない。

繭はいつでも、背が高いだけの平凡な十七歳だ。

首を横に振ると、明即はそんな繭の頬を自分の大きな手の平で包んでしまう。

「いいんですよ。知らなくて。私はあなたに救われた。私の大事な女神さま」
女神さまなんて。

そんなことも言われたことがない。

どうしたらいいのかも分からない繭に向かって明即はささやく。

「マム」

思えば、名前なんて明即から呼ばれたことがない。いつだってお嬢様やお姫様。

混乱して明即の瞳を見上げてみれば、紫の瞳の奥が激しく燃えている。

「愛しています。どうか、私と共に生きてください」

彼は、繭がまだ十七歳だということを分かっているのだろうか。年上の男からの情熱的過ぎる言葉に、繭は眩暈を覚えた。

けれど、次のセリフで繭の気分は急降下する。

「あなたが居なければ、また国を滅ぼしてしまいたくなりそうです。こんな物騒な愛の告白なんて欲しくはなかった。幾らなんでもあんまりだ。

明即は、繭を溶かすように甘く甘く微笑んだ。

「幸せにしますよ？」

繭は、何を言うべきか迷ったが、思わずカツと頭に上った言葉を叫んだ。

「この、ロリコン！」

悪態をついて、繭はやつと何かを手に入れたような気分になった。だって、彼は繭を裏切らない。

たとえ裏切ったとしても、今ここに、きっと形のないものがある。と、繭に信じさせてくれたのだから。

物語ではいつも天界に帰ってしまう女神さま。

けれど、彼の女神さまは彼の傍らに。

女神さま、おちた。

怖い顔してるよ

初めて見つけた女神さまは、彼の職場で泣いていた。

黒の長い髪、黒い瞳、細い体に長い手足。この国、最高級の着物を身に着け、細い首や小さな耳には重いほどの宝石をつけられ、結いあげられた髪にさえ滅多に見かけないほどの髪飾りが光っている。けれど、その彼女自体はまるで鎖に繋がれた猫のようにうずくまって、衣裳とは比べものにならないほど質素な書庫の長椅子に座り込んでいる。

「 こんばんは」

なるべく怖がらせないように声をかけると、小さな顔が彼を見上げた。

目が真っ赤になっている。それを見とがめられたと思ったのだろう。

彼女は必死になって目をこすった。

それでは、似合わない化粧も剥がれ、彼女の目も余計に赤くなってしまう。

手巾を差し出してやるが、彼女は受け取らなかった。

それが、明即と繭の出会いだった。

明即は飽いていた。

それは、思い出せばキリなどなく、ほとんど物心つく頃にはその傾向があったようにも思われた。

生まれてすぐに実母に疎まれ、五歳になる頃には乳母の手も借りずに明即は離宮を出た。実母はその後、三年もしないうちに自ら世をはかなんでしまったが、明即にとっては当然のように思えた。彼女は王の妾として召し上げられながら気が弱く、そして正妃に先ん

じて男児を産んでしまったことに脅えていた。だから明即に対してほとんど愛情らしい愛情も注がず、ほとんど恐怖の対象である王に似た息子にさえ怯えた。明即から遅れて一年後、正妃が男児を産んだことも彼女の精神を多大に揺るがせたのは言うまでもない。

そんなこともあり、実母から離れて暮らしていた明即が弟と出会ったのは、明即が五歳で良家の子女が通う全寮制の学院に厄介払いされる直前まで無かったのだった。

腹違いの弟、崇鵬は利発な子供だった。多くの家庭教師に囲まれ、誰からも愛されて育ったにしては自分と明即の立場をよく理解した。だから、一つ年上だがほとんど仮面のような顔をした兄に、彼も愛想笑いで形式的な挨拶を終えた。

挨拶を終えてから、明即は弟が王になるだろうと考えた。年の割に聡い彼は、明即に無邪気な子供の憧憬を向けはしなかったから。

継承権争いになれば、明即は第一に担ぎ出される立場にあるが、そんなことが起これば真つ先に冥界でも怯えて泣き暮らしているであろう実母に会いに行つてやろうとさえ思った。それは、実母への思慕ではなく、明即を死ぬまで疎んだ彼女への復讐にも近かった。

あまりにも世を厭う明即が国政に興味を抱いたのは、皮肉なことに実母が死ぬきっかけになった正妃の存在だった。

彼女は実に正妃らしい女性で、美しく聡明で、そして慈愛に満ちていた。そしてその慈愛を、明即にまで向けたのだ。貴族の彼女にしてみれば、最初に妾が男児を産んだという屈辱を、明即に目をかけるということ昇華していたようだ。彼女の同情と優越の混じった憐れみを断る理由もない明即は、されるがままに弟と比べられる生活を送ることを享受することにした。どのみち十八になるまで学院を出られることはなかった。里帰りに顔を出す度に弟の自慢話を聞かされる程度の苦痛ならば明即にとってどうということでもなかったのだ。

それが、十六の年に転機が訪れる。王が早逝したのだ。まだ四十一代の病死。毒殺の噂も流れたが、明即は限りなく自殺に近い病死だ

と思つてゐる。彼は一日の大半を執務室で激務をこなし、夜にほとんど眠ることが無かつたという。その代わり、彼は国民にも貴族にも愛された王だった。

急遽、学院から呼び戻された明即は、残された弟と正妃に連なり葬列に加わつた。

父という意識はなかつたが、普段は何が起ころうと顔色ひとつ変えない弟が珍しく苦痛に顔を歪め、常に気高くあるうとしていた正妃が泣き崩れるのを見つめ、明即は初めて自分が住む国について考えるようになった。

それからの明即の行動は早かつた。弟を王にするべく継承権を放棄し、辺境中の辺境の南概という領主に収まり、そして王となつた弟には何かあれば必ず力になると誓約した。

そうして、八年近く経つた。

弟は王として独り立ちし、元々の土台は最高のものだった国を安定させた。

そうなれば、着々と辺境で力をつけていた明即が疎ましくなるのは、人の情としては正しい反応だ。

しかし、内政の勢力争いに頭を傾けつつある弟は、明即から見て危うかつた。どちらかに傾くということは、片方は手薄になるといふことだ。

それを分からせるためにも、下手をすれば国が滅ぶ前兆にもなり得る戦を起こした。結果としては、明即が前線に送られ、危惧が明るみに出てしまつただけだったが。

「明即！」

夜の書庫の奥にまで響く声を聞いて、明即は行燈に火を入れた。

まさか、慌てた大臣が異世界から女神さまなるものを召喚までするとは、明即でも驚いたものだ。

書架から顔を出すと、初めて会つた時よりも幾分、小奇麗になつた少女が居た。

年は十七歳だと言った。ちょうど、明即が南概の領主になった頃と同じ年。しかし、こんなにも可愛げがあつただろうかと、明即を見上げて「どこに居たの」と唇を尖らせる少女を見ながら思う。

「こんばんは、お嬢様」

「こんばんは」

この可愛らしい女神さまは、こちらの言葉を丸きり知らないで落された。翻訳するような便利な道具はないので、彼女は今、必死に言葉を覚えようとしている真つ最中だ。この頃には、明即の名前を理解し、簡単な会話ができるようになっていた。

すでに、明即は大臣の間者であることは伝えてある。王宮に居る大半の者がこの何も知らない少女をまるで頭の出来の悪い小娘のように扱っていることが、明即にしてみれば失笑を押さえられない。彼女は見た目ほど頭の悪い娘ではない。

彼女のやっていることはほんの少しのことだ。何かを尋ねられても首を傾げる。質問には適当に答える。決して賢しいことは言わない。

書庫で泣いていた彼女と出会っていたので、明即は昼間の彼女が演技をしていることはすぐに分かった。

しかし、彼女は慎重だった。長年築いてきた明即のほとんど完璧と言つていい人の好きそうな仮面をもつてしても、彼女が書庫へ安心して来るようになるまでひと月以上かかった。その上、明即が実は大臣の間諜であることも教えるという、明即にしてみれば恐ろしいほどの譲歩をして。

彼女のことを知れば、それは当然のことだった。

明即と違い、彼女は命がけでこの演技を続けているのだから。

だから、明即は彼女にとってはとても重要なことを、伝えることにした。

「どうですか。最近」

聞き取りやすいようにゆっくりと喋つてやると、うん、と一つ肯いて、彼女はいつものように俯いた。昼間では、誰にも見せない本

当の彼女。

彼女はたどたどしく、明即到弱音を吐いていく。

食事が合わず、お腹を壊してしまったこと。

衣装が重くて、いつもつまずきそうになること。

貴族のお嬢様たちの会話は他人の噂話や悪口ばかりでいつも気が重いこと。

羅心の勉強は面白いがそれを言えないこと。

最後にはいつも咳くセリフがある。

イエニカエリタイ。

異世界の言葉だ。けれど、予想がつかないはずもなかった。

「あなたに話しておかなくてはならないことがあります」

見上げた黒い瞳に明即が映った。

明即は、傷ついた小動物にさらに無体を働くような気分になった。なぜ、自分が彼女に話してやらなければならぬのだろうか。

それは、曲がりなりにも彼女の庇護者となった弟の崇鵬の役目だ。しかし、彼は一向に王宮に馴染めない彼女を既に見限っている。王の態度は臣下にも伝染する。この小さな少女を召喚することを強引に勧めた大臣たちでさえ、彼女の処遇を決めかねていた。

お払い箱ならばまだいい。最悪は、処分だ。

「あなたはもう、あなたの世界には帰れません。この世界には、あなたを帰す術はないのです」

明即がこれを告げたのち数日、彼女は書庫へ現れなかった。

「あなたは、あの少女をどうするつもりなのですか？」

王の私室で行われる定期報告の際に、明即はつい口にした。

書面に視線を走らせていた弟は自室の椅子に腰かけたまま、報告書から顔を上げて訝しげに明即を見遣る。

「見たのですか」

私室には兄弟以外に誰もいない。だからか、崇鵬は明即到敬語を使って憚らない。明即の方は、すでに口調として癖になっているの

で、わざわざ直そうともしていないが。

「これでも王宮で過ごしていますから」

明即の言葉に、弟は珍しく黙り込んだ。彼は頭がいいので、他人との会話で自らが口ごもることはあまりない。

「兄上であれば、どうなさいますか」

珍しいこともあるものだ。

崇鵬が意見を求めるなど、明即はほとんど記憶にない。

面白がるさまは見せず、明即は考えるように目を細めるにとどめた。

「元の世界に返せず、寄る辺もない少女を一人放り出しては、外聞は悪いでしょうね」

「兄上は、あれをご存じないと見える」

崇鵬はそう吐き捨て、あの娘がいかに愚かかを並べた。

いわく、何かを期待するような目がうつとうしい。

いわく、彼女の希望が毎回高額に規模の大きいものになっていく。いわく、女神とは男に媚を売るために召喚されるのか。

弟が不機嫌に言うさまを見ながら、明即は己の心が冷えていくのを感じた。

唐突に、飽いた。

女神の意味を、理解できたような気がしたからだ。

崇鵬が言った彼女の表向きのさまは、まさに今の国の状態なのだ。誰もが上を向き、何かを望み、自身の足元に目を向けない。

上昇志向は必要だが、片寄りには良くない。ましてや権力者ともなればなおさら。

女神とは国の危機に訪れる、最後の僥倖だ。

彼女を通して己を見つめ、国を見つめ、初めて彼女のありがたさを感じるのだろう。

特別な力などそこにはない。

国に囚われない、憐れな女性を人柱に、国を築くのだ。
もしも、明即の仮説が正しいのであれば。

確かに崇鵬が彼女を妃に迎えればいいのだろう。

彼女が疎まれるにせよ、殺されるにせよ、それは国のためになる。
しかし、と明即は思う。

誰かの犠牲、しかも何も知らない女たちを犠牲にするような国は、
いつそ滅びてしまえばいい。

崇鵬の代で国が滅びるようなことにはならないだろう。しかし、
彼がその国政の方向を修正しなければ滅びは確実に訪れる。

それは、明即が少し手心を加えるだけで、実に容易く。

崇鵬の破滅的な未来を見通して、寢所に大人しく戻る気にもなれ
ず明即が書庫に行燈を向けると、

「お嬢様？」

いつもの長椅子に、着物の裾が邪魔なのか払いのけてうづくまっ
ている少女が居た。

「遅い」

数日ぶりだということを忘れたような口ぶりに、明即は思わず苦
笑する。今まで国を滅ぼすことに傾いていたものが天秤の皿から逃
げいくような。

「久しぶりですね。本日はどうされたのですか。おやつのお菓子が
美味しくなかった？」

「何処に行つたの」

居眠りするほど待ちくたびれたという彼女は、大きく伸びをする。
もう会話に差し支えないほどの単語を覚えたようで、明即の言葉も
きちんと理解しているようだった。

「怖い顔してるよ」

見上げた彼女が、泣くように笑った。

明即は、長い溜息をついた。

「給料が減りそうなのですよ。大臣からの依頼が減りまして」

「いいことじゃない」

悪いことは嫌いだ、と少女が笑う。

元来、明即に厳密な良い悪いを決める判断基準はない。
必要か、そうではないか。

ならば。

この優しい彼女が欲しい。

彼女は、今この時この国を滅ぼすと決めた明即にこそ訪れた女神
さまなのだから。

笑う少女を眺めながら、明即はひっそりと笑った。

国も名誉も地位もくれてやった。

だから、最後の飴をくれてやるう。

国を滅ぼすか、少女を差し出すか。

最初で最後の、勝負をしようじゃないか。

愛しい愚かな弟よ。

怖い顔してるよ(後書き)

このお話で一応終わりをつけさせていただきました。
番外編を書く場合はまた項目作ります。

お読みくださり、ありがとうございます。

何が望みですか

にっこりと微笑んだ女神さまは、誰よりも幸せそうで、不幸だった。

小菊が彼女に出会ったのは、王宮の隅にある女官棟へと帰る途中だった。

先輩の女官に仕事が遅いと置いていかれ、初日から泣きそうになりながら一人戻るその途中で、呼びとめられたのだ。まるで、待ち構えられていたように。

それなりに裕福な家で生まれ育った小菊も、そうはお目にかかれないほどの着物と飾りを女神さまは小奇麗な人形のように飾りつけられていた。

彼女は遠目で見るよりも背が高く華奢で、まるで働いたことのないような白い肌で、年の頃は小菊とそう変わらないように見えた。

茂みの影で世間を知らずに微笑む彼女が、何の魔法の力も知識も持っていないことはすでに王宮中の人間が知っていることだった。

ついこのあいだまで、彼女はこちらの言葉と文字を必死で覚えていたことは、女官の間でも話題に上っていた。いったい、何のために呼び出された女神さまなのかと。

つまり、異世界からやってきたこと以外において、女神さまはどこをとっても、ごくごく普通の娘に見えたのだ。

そんな彼女が小菊を呼びとめ、何事かと小菊は内心首を傾げる。彼女のわがままは日毎、金のかかるものになっていくと女官長と宰相殿が話していたという。

小菊は眉をひそめたものだ。金は、わがままのために使うためにあるのではない。

しかし、小菊の疑心を裏切って、女神さまが望んだのはとんでもないものだった。

「私ね、王宮から出たことがないから出てみたいの。だからね、王宮で働きたいの」

そのための身分と、服を用意してほしいという。

当然、小菊は断った。

何の得があつて、小菊がそんな犯罪めいたことに手を貸さなければならぬのか。

第一、女神さまの言う通りに何でもしなくてはならない法律も理屈もない。

女神とは、国の危機に訪れるという救世主だ。

しかし、今は賢君の御代。国民は平和を謳歌している。所詮、彼女は役立たずの女神さまだった。

だが、彼女は幾度も小菊の前に現われた。毎日は来られないのか、折を見ては小菊を呼びとめる。

小菊は王宮に仕える女官だ。王命で大切な客人として扱われている彼女を無碍には出来ない。できないが、すべてのことに言うことを聞かなければならないことはない。

けれど、小菊の無視にも彼女はめげなかった。

たいてい、小菊は先輩女官の荷物をいっぱい抱えている。雨の日には傘をかかげてくれた。風の日にはどこから手に入れたのか大仰な外套で小菊をかばってくれた。

彼女は手ぶらでは来なかった。いつだって、甘いお菓子を持ってきた。

ある日、とうとうそれを先輩女官に見咎められてしまった。

「申し訳ございません。女神さま！」

その先輩女官は女神さま付きではない。もっと高級な女官が女神さまにはつけられていたし、この先輩女官が言っていたのだ。今代

の女神さまは役立たずだと。

そんな言葉を忘れたかのように、先輩女官は口奇麗に女神さまに謝罪をつらつらと並べたて、あげくに果てには、小菊の家のことまで持ち出してきた。

小菊の家は裕福だ。けれど、貧しかった。とにかく、十一人もの弟妹たちを満足に食べさせていくことは、いくら見入りが良いからと言って両親で賄いきれるものではなかった。

だから、裕福な貴族の娘ながら、小菊はこんな下っ端女官として王宮に上がったのだ。地元の目につく仕事はやり尽くした。それでも足りなかったから、小菊は知人の貴族に頼み込んで王宮に来た。いくら下っ端でも女官であれば、他の仕事などよりもずっと給金がいい。

一通り先輩女官の話聞いた女神さまは、のんびりと笑った。

「いいのよ。私がこの小菊にお話を聞いてもらっていたの」

周りの女官は皆年上ばかりで同じ年頃の娘が珍しかったのだと。女神さまは、そんな一言で先輩女官をあっさり引き下からせてしまった。

さつさと去っていく先輩女官の背中を眺めながら、小菊は唸るように吐きだした。

「……何が望みですか」

女神さまは、にっこりと微笑んだ。

そして、彼女が望んだものは、ひどく小さなものだった。

まず、服とくつ。まさか女神さまの格好で働けはしないから。そして小菊の遠縁で、田舎から出てきたという証言。そして、王宮で見つくるって欲しいと言われたのは、下女の仕事だった。

この国には奴隷はいない。けれど、下女の仕事は女官よりもきついものだ。掃除に洗濯からありとあらゆる雑用まで。身分の低い者がどこかの貴族に紹介状を書いてもらえば、すぐにでも就ける仕事

だ。

「あなたには決して迷惑はかけないわ。その証拠にこれを」

手渡された包みは重かった。およそ小菊が手にしたこともない、大金。これがあれば、広いばかりの屋敷の修理が出来るのではないか。少ない使用人にも給金を充分に出してやれる。

「月に一度、これだけのお金をあなたにあげる。だから、あなたは私の身元を保証してくれればいいの」

何の苦勞もせず、小菊がすることと言えば、粗末な服とくつを用意して彼女の身元を保証し、下女の世話役に彼女を紹介するだけ。

話がうますぎる。

思わず疑って彼女を見つめるが、世間知らずが服を着て歩いているような女神さまが嘘をついているようには思えなかった。

そして、このうまい話は彼女の言葉を寸分も違わず、毎月繰り返されたのだった。

初め、小菊は半信半疑で、しかし先輩女官の小言から救ってもらったことと、すでにすぐには返せない金を受け取ってしまった（屋敷の雨漏りがいよいよひどいと故郷の弟から手紙を受け取った直後だった）ので、粗末な服を用意し、まるで少年のようになった女神さまを連れて下働きの世話役に紹介したのだった。

王宮で働いて二十年は経つという、皆に女将さんと呼ばれている年嵩の女は女神さまをじろじろと眺めたあと、小菊に視線を落とすた。

「本当に、こんな細い子供が役に立つのかい」

幸いにして、女官ではない彼女が女神さまの顔は知らないようだ。それは他の者たちも同じようで、小菊は胸をなでおろした。

「私の遠い縁者なのですが、家族を早くに亡くしてさまよっていたところを私の家で匿ったのですが、恥ずかしながら私の家も余裕がなく、彼女も働きたいと申しますので、こちらで面倒を見てはいた

だけませんか」

そういう理由は多いのだろう。

女将はふくよかな体を揺らして鷹揚に頷いたので、女神さまは小菊の隣で頭を下げた。

「マユと言います。よろしくお願いします！」

さっそく女将に仕事のことを聞いていく女神さまを見ながら、小菊は驚いた。

小菊は、今の今まで、彼女の名前を知らなかった。

それから、マユは下女として働き始めた。

毎日部屋を抜け出してくるのだろう。彼女はよく務めた。

けれど、小菊が感じた最初の印象通り、彼女にとって下女の仕事は慣れないことの連続だったらしい。

仕事が終わると女官棟の隅でいつも泣いていた。

肥溜めの掃除は下っ端の下っ端の仕事だ。夏でも冬でも誰かがやらなければならぬ。

最初のころ、マユは茂みの奥で吐いていたことを小菊は知っている。

寒かろうが水仕事は当たり前なので、彼女の白かった指はみるみる内にあかぎれだらけになった。

しかし、泣こうが、怒鳴られようが、マユは辞めなかった。

その甲斐あってか、冬が過ぎて春になる頃には彼女は下女の仕事をすべて出来るようになっていた。

ねえ聞いて！

「良い子を紹介してくれたよ」

何もしていかないはずの小菊が女将に呼びとめられて、そんな言葉をもらった。

きっとあの子は頭がいい。女官の仕事も覚えさせてみたらどうだろうとさえ。

元々、世話焼きの気質なのだろう。女将に勧められて、小菊も彼女の言う通りにしてみるといいと思った。

王宮で働くことが好きならここに居ればいいが、女官見習いなら他の貴族の家でもいい。

けれど、マユは全てを断った。

「忘れたの？」

そう、彼女は異世界から呼ばれた役立たずな女神さま。

小菊に渡している金額から見れば、小鳥の涙ほどの給金を手にしたときの彼女といったら、まるで世界一の宝石でも手に入れたような顔をしていた。これで新しい服とくつが欲しいのだと言っていたのに、彼女は王宮の外へは出なかった。あんなに、出たいと言っていたのに。

どんな素晴らしい着物もかんざしも、彼女を笑顔には出来なかったのに、彼女の給金で小菊が買ってきた粗末な古着を喜んだ。

仕事の終わり、仕事の合間、小菊に話す彼女の話は楽しかった。

女官という仕事柄、小菊も勉強はたしなんだほうだが、彼女に知っているのは宰相でもあり、国一番の学者でもある羅心さまが家庭教師だ。何を話しても、彼女が先輩女官の言うように、愚鈍で無知には見えなかった。

彼女は普通の少女だ。けれど、女神の肩書で人々は彼女を笑い物

にする。

それが、小菊にとってはどうしようもなく悔しいことだった。それでも、マユは幸せそうに笑うのだ。

泣きはらした目を一生懸命、化粧で隠して。

そんなある日、マユが約束の日でもないのに金を持って小菊の元へと訪れた。

この頃には、すでにマユのお陰で小菊の家は充分に潤っていた。屋敷の修繕も終わり、使用人たちに十分な給金を渡すことができ、弟妹たちに新しい服と本を買ってやることができ、両親も領地で安穩に暮らしている。だから、そろそろ小菊も領地に帰ってこいと言われていた。

小菊が居なくなったら、マユはどこで笑えばいいのだ。ただ、それだけが心配で小菊は帰郷を先延ばしにしていた。

数週間前に、マユは下女の仕事を辞めた。それは、急にマユに対する行儀作法の授業が増えたり、月に一度程度だったお嬢様たちのお茶会（これをマユは非常に嫌がったが）に頻繁に誘われるようになったためだったり、理由はあったが、最終的にはマユが自分で決めて辞めた。

小菊に対する金はこれからも欠かさず渡すというので、今までの半分ということまで話をまとめた。

きつと、マユは小菊に会いに来る理由が居ると思っている。そう感じたから、小菊はあえて断らなかつたのだ。

けれど、今渡されている包みの重さは半分の重さではない。マユを見遣れば、彼女はいつもものように微笑みながら、けれどどこか弾んだ声で言った。

「あのね、私、南概に嫁ぐことになったの。今まで良くしてくれて

ありがとう。小菊」

小菊は泣きだしたいのを我慢した。

それが、何を意味するのか。

彼女は本当に分かっているのだろうか。

いや、きつと分かっているのだろう。

王は、何も知らない彼女を、厄介払いしようとしている。

いくら要らない女神さまとはいえ、マユは簡単に売り買いできる人形ではない。

ちゃんと一生懸命に生きている、ただの女の子だ。

悔しかった。

泣きたくなかった。

小菊はもう、マユのことをただの女神さまと侮れない。

もう、彼女とは友達だった。

マユが売られるように南概へ行ってしまったから、しばらくして、

小菊も王宮を辞めた。

理由は簡単だった。南概が、小菊の故郷と近いのだ。

突然女官を辞めて帰ってきた姉を弟妹たちは驚いて迎えたが、両親はよく帰ってきたと溜めこんでいたらしい見合い話をそそくさと勧めてきた。そんな家族をあしらって、小菊は南概の領主に、手紙を書いた。

奥方と合わせて欲しい。それだけの手紙。

しかし、返ってきたのは、意外な返事だった。

「ねえ、聞いて！」

王宮に居た時よりも、幾分動きやすそうな着物を着た、飾り気の

ない娘が小菊の前で大きく嘆いた。

これでは、田舎貴族の娘の小菊の方がまだ小綺麗な格好だ。しかし、そんなことを気にした様子もなく、娘は目の前の、自分で作ったという焼き菓子を頬張りながら呻くのだ。

「もう、ホント勘弁してほしいわよ！ あいつおかしいのよ！ 仕事で忙しくせに早く帰ってきては、私に可愛いだと綺麗だのって、意味の分からない小芝居繰り広げて、こちらアンタの暇つぶし人形じゃないっての！」

一度、夕食を口に詰めて黙らせたいと彼女はずっと、手ずから入れたお茶を飲む。

「明即様は、お忙しい方とうかがっているわ。それでも夕食を必ずご一緒するなんて、とても楽しみなのね。マユと話すことが」

「楽しみなら、もっと私が楽しい話をすればいいと思う」

むくれるマユを見てみると、王宮で小菊が見ていた彼女は半分以上人形だったのではないかと思う。

ここに居る彼女は、実に感情豊かで、普通の、楽しい娘だった。

「ねえ小菊。私の愚痴ばかり聞かせてごめんね。もっと楽しい話をしよう」

微笑む彼女に、何でも聞かせたくなった。

幸いにして、小菊に話題は尽きなかった。彼女は小菊の弟や妹の話をとてもしそうに聞いてくれるし、小菊の両親がひっきりなしに持つてくる見合話にも年頃の娘らしく興味津津に聞いた。マユの異世界の話も面白いことが多くて、けれどマユの思い出と、小菊の思い出はどれも似たような、異世界だからといってほとんど違いがあるようなものではなく、ただ、一緒に懐かしく思った。

けれど、そういうとき、マユはひどく落ち込んだ顔になる。それはそうだ。彼女はもう、自分の故郷には帰れないのだから。

そういう時には、何を言っているのかかわからず、小菊まで黙りこんでしまうものだから、逆に彼女が小菊を慰める。もっと、気の利いた言葉を言えるようになれば。

そうして話しこんでいると、いつも夕方になってしまふ。
だから、

「楽しそうですね。お嬢さんがた」

いつの間にか客間に現われる彼の人に小菊はいつも驚いてしまふ。すらりとした長身に、すっきりとした鼻梁に薄い唇、長い黒髪をゆるく結わえた姿はくだけた装いだが無思議と堂々としていて美しささえある。誰よりも今代陛下に似ているその人は、明即といい、賢君崇鵬の腹違いの兄君だ。早々に継承権を放って辺境のこの地の領主に治まったという、この人もまた、才物で知られている。

マユの嫁いだ先が、そういわれる彼だと知ったから、小菊は正式な面会申し込みとして手紙を送ったのだ。

奥さまの知己であるが、ほとんど挨拶も出来ずにそちらへ嫁いでしまったので一度会わせていただきたいと。

手紙の返事は早かった。そして簡潔だった。

私に未だ、妻はいない。

私の手元によやくやってきたのは、愛しい人だけ。

あなたが本当に彼女の知人であるならば、彼女を説得してほしい。

なんと、マユは未だこの素敵な南概の領主と結婚していないとい
う。

理由はといえば、

「久し振りです。繭」

あつという間に警戒されている距離をつめて、マユの背中に流しただけの長い黒髪を指に絡めた明即は、恭しくそれを口づける。が、すぐにマユに叩き落とされてしまった。

「毎日毎日、それやらないで！」

真っ赤になって叫ぶマユによると、明即とは王宮で出会ったらしい。だが、その時は本当に友達で（年上の男性を友人に出来る彼女

はずごい）恋人などではなかったらしい。そして、マユが本当に王宮を出て行きたくなったら連れ出してくれるという約束（今となつては小菊には結婚の申し込みにも聞こえるが）をしてきていたという。

ただそれだけの関係だったというのに（マユにしてみれば）こちらに来てから方便だったはずの（そう思っているのはマユだけだ）結婚話を盾にして、毎日毎日マユに熱くて甘い愛の言葉をささやいてくるのだそうだ。

小菊も女官として務めていたからそれなりに耳年増だ。嫌よ嫌よも好きのうち、でもこの貴公子に身も心も預けてしまっているのではないかと勘繰っていたのだが、それを察したマユが真つ向から全否定してきた。それはもう、泣いて懇願するほどの否定ぶりだったので、本当なのだろう。それに、小菊が遊びに来ていても、まったく人目を気にしない愛の告白をしてみせる明即という男は、マユの嫌がるやりとりを心底楽しんでいる節もある。

女官としても女としても、経験の浅い小菊でさえ、あきれれるほど厄介な男だ。

「もうやめて！ 事あるごとに頭撫でないで！」

「そんなつれないあなたも言うことを聞かない子猫ようで愛らしいですよ」

それでも、マユがここを出ていこうとはしないのは、この厄介な男の言葉が嘘ではないと知っているからなのだろう。

「繭」

彼女の名前を呼ぶ彼の声が、こんなにも甘いことも。

一度、本当に嘘をつかないという約束をして、マユに尋ねてみた

ことがある。

明即のことを本当に嫌っているのかと。
彼女は悩んで悩んで、一言つぶやいた。

あの男の思い通りになることが悔しい。

近い将来、どんなに美しい花嫁になることだろう。
きっとマユは微笑むだろう。それはそれは幸せそうに。

だっておかしいだろう

彼女は、想像よりも幼い、少女だった。

その辞令を見た誰もが、複数人に及ぶ誰かの色々な事情と思惑が絡んでいると分かっただろう。

数少ない仲の良い同僚が憤慨するなかで、当の朋来だけが無感動に辞令だけが書かれた手紙を開いた。一緒に入っていた金札が、まるで手切れ金のようにだと思いながら。

辞令によれば、この金で南概まで送り届けろという。

異世界からわざわざ召喚しておきながら、厄介払いするという女神さまを。

朋来は、生来、あまり人との縁に恵まれなかった。

両親からして、生まれたばかりの朋来を嫌い、他家へと預けてしまつところから始まる。

それは、朋来の髪と瞳の色に由来する。

この世界には様々な色の人種が溢れている。学者の誰かが七色の虹と呼ぶほど多岐に及ぶが、ただ一色、あつてはならない色がある。銀だ。

昔の大罪人の髪の色だとか、暴虐の限りを尽した王の末裔だとか、言い伝えは様々あるが、とにかく銀色の髪や瞳の色というものはどの国でも嫌われ、恐れられた。

逆に金色が貴色として重んじられている。

金と銀、何の違いあるのだ。

そう言い切つたのは、朋来を預かった家の当主だ。豪放磊落を絵に描いたようなその人は岩のように硬い大きな手でまだ幼い朋来の

頭を撫でながら、豪快に笑った。

お前は良い目をしている。強くなるぞ。

誰も近寄らない幼子に剣の稽古を自らつけながら、彼は朋来を実の子のように育ててくれた。

だから、養父が戦にたおれ、年老いたその妻と血の繋がらない妹だけが残されたとき、朋来は宮の護衛士になることを決めた。彼らもまた、歩く呪いである朋来を人として見守ってくれたのだ。

恩を返すつもりだった。

けれど、護衛士の見習いとして都へ向かうときに贈られた養母と義妹の言葉を、朋来はのちに振り返って後悔する。

幸せにおなり。

それだけを願っていると告げた彼女たちの言葉の意味を分かっていた。いなかった。

それから数年後、ようやく護衛士になった朋来の元に届いたのは、養母の死と、義妹の自殺だった。

元々あまり健康ではなかった養母は朋来を見送ったあと、病気を悪化させた。それを朋来に隠したのは妹だ。彼女はただ一人で家を守るために、好きでもない男と結婚し、だが、男の度重なる浮気と借金に耐えきれず、毒をあおったという。養母はその知らせを聞いたあと、妹に謝りながら泣いて亡くなったという。

家督を、朋来に譲るといふ遺言を残して。

無感動な管財人から遺言書と事の顛末、そして当主の証である、かつて憧れた養父の剣を渡されて、朋来は途方に暮れた。

それから数年。朋来はいくらかの戦地で功績を挙げ、部隊を任せられるようにまでなった。部下は初めこそ朋来を恐れたり、嫌ったりしたが、やがては信頼を向けるようになった。迫害はされていたが、育った環境が良かった朋来は人当たりの良い優しい性格で、しかし剣を取れば養父譲りの豪剣を奮ったので、軍属の上司としては最高

の評価を受けた。

ゆくゆくは、何人もの將軍を束ねる大将の座も夢ではない、とまで評された。

だがその矢先、朋来の部隊は解体されることとなる。

それは、大臣が隣国と手を結んで国境を超えさせるといふ今までにない大規模な戦のあとだった。

不意打ちだったということもあり、かなりの苦戦を強いられ、朋来は何人もの戦友を亡くした。その慰霊祭の後、呆気なく辞令はやつてきた。

宮の近衛兵としての栄転。

辺境の、激戦地だった砦に辞令を持ってきた宮からの使者は、むしろ栄誉なことだと誇らしげに言ったが、近衛へと迎えられる朋来は隊長という任も軍で築いてきたはずのそれまでの地位も全て無くすという。当然、部隊は解散で、部下たちにはそれぞれ別々の職務と地位が用意されていた。受け取った誰もが無言で辞令の書かれた信書を握り潰した。血気盛んな部下たちが怒鳴り散らすことも忘れてただ耐える姿に、朋来は抱いてはならない疑いを持ってしまった。

もしかすると、この国は滅びへと向かっているのではないだろうか、と。

自分を慕ってくれた部下とは散り散りに別れ、それまでの功績や地位をすべて剥奪された朋来は今、王宮近衛隊の一介の護衛士として居る。

砦を守る兵士と違い、近衛の仕事は貴族的だ。近衛の兵士は定期的に開かれる御前試合に参加し、その結果で、または縁故で、築いた人脈で、自分の地位を確立していく。

朋来は今までほとんど気にされなかった髪や瞳の色で毛嫌いされ、あつという間に人目につかない宝物庫での警備にあたることになった。

近衛隊の隊長は、いずれは大将にと囑望された身分の高い男で、蹴落とすことに慣れた彼に辺境育ちの朋来になすすべは無かった。

今回の女神さまを送り届けるといふ左遷のような辞令もその、ほとんど最後の仕上げだったのだろう。

「忌色にはふさわしい仕事よな」

「何だと！」

通りすがりの言葉に同僚の方が激昂したので、朋来はそれをなだめてやった。

忌色とは、朋来の髪と瞳の銀色を指す別称だ。

しかし、せつかなだめてやったというのに、通りすがりの男たちはそれを嘲笑うように怒鳴りつけた同僚に噛みついた。

「忌色に忌色と言って何が悪い。血に塗れた忌色など、悪鬼羅刹と変わるまい？」

「この…っ！」

とうとう血の気の多い同僚が男に殴りかかるうとするので、朋来はその腕をつかんで止めなくてはならなくなってしまった。

「やめなさい」

今にも勢いついて腕を止めると、同僚は思い切り顔をしかめたが、男たちはひときわ笑って廊下を通り過ぎていく。

「銀獅子などと呼ばれるとはおぞましい限りよ。お前など、王宮にふさわしくない。役立たずの女神を連れて、どこへなりと行くがいさ」

同僚の同情の目を受けながら、朋来はまだ見ぬ女神さまを憐れに思った。

国を救えと召喚された女神さまが、この国でも日陰の身である朋来と同列に扱われるなど、あつてはならないことだ。

朋来と同じく、近衛の別部隊に飛ばされた部下や同僚たちの同情を適当にあしらって、広い宿舎の廊下に一人になると、大きな溜息が洩れる。

いつから、この国はこのように歪な形で育ってしまったのだろうか。

学者ではない朋来でさえも分かるほどの。

「隊長」

聞き慣れた、しかし今やそう呼ぶ者の少ない呼称を聞いて、朋来は振り返って驚いた。

「久しぶりじゃないですか。慶諾」

変わらない、水色の髪の毛のだらしない官服姿の男を見て、朋来は思わず笑う。

しかし、慶諾の方は無表情に肯くだけ。彼は変わらない。

かつては同じ激戦地で戦った、朋来にとって無二の戦友であり、元副官。

家格の高い彼がどうして朋来などの副官に、などと嘲笑う輩の口を一瞥で塞いでしまう、冷たい青の眼光が懐かしくて朋来は息をついた。

「どうしたのですか？ 君は……いや、あなたは大隊の隊長となったのでしょうか」

大隊とは王直属の軍のことで、若くしてその隊長に抜擢された慶諾は”青龍閣下”と呼ばれている。彼の家は、護衛士の大將を幾人も輩出するような武門の大貴族だ。それも含めての通り名だった。

かつての部下とはいえ、一介の近衛である朋来が気安く声をかけていい身分ではない。

改めて自分の立場を思い出し、苦笑した朋来を無表情に見遣って、青龍閣下は平坦な声で驚くべきことを告げた。

「隊長は辞めてきた。これからあなたの下について南概へ行く」

大貴族の口調とは思えないほど砕けた言葉遣いは隊長となっても治らなかつたようだ。

見当違いのことを思い至って、朋来は珍しく自分が混乱していることを知った。

「……確かに、この辞令にはもう一人護衛がつくと書いてあります

が……」

簡潔すぎる辞令には、確かに護衛は二人とあった。しかし、誰とは書かれていなかった。朋来は悪くすれば自分一人で女神さまを護衛しなくてはならないのだろうかと考えていた。

「あいつは昔から狡賢い上に得って言葉が大好きだ。だからくれてやった」

慶諾の言う、あいつとは、恐らく近衛隊長のことだろう。そういえば、慶諾の実家と劣らぬ大貴族だったと朋来は思い出す。

「くれてやった、とは？」

「あんなに大将になりたがっているんだ。欲しいやつがなければいい」
「そうだろう、と同意を求められて朋来は呆れたが、いつになく饒舌な慶諾は一つも表情を動かさないまま続ける。

「あんだだって、そう思ったからこんなところでそんな辞令を大人しく受け取ったんだろう」

そんな、と慶諾が指さした、名目上は王からの勅令を朋来は失笑するような思いで見た。

「俺の知ってる“銀獅子將軍”は甘いだけの男じゃない」

それに、と慶諾は朋来の辞令をひつたくるように奪うと興味も無さそうに視線を落とす。

「上官になって分かった。あんたの敬語は命令するためにあるんだ。俺にはあんたを従わせることはできない」

暗に頑固だと評され、朋来は呆れて笑う。しかし、慶諾は顔を歪めた。

「……だつて、おかしいだろう。今のこの国は」

「……あなたも、そう思いますか」

慶諾の言葉に朋来は笑みを消す。

今代陛下は賢君として名高い。それは先代陛下がよく治世を守ったということでもあるし、王宮から戦地は遠い。けれど、ふと足元に目を向ければ、首を傾げることばかりだ。不用意に上がる税、奸臣の横行、そして何より、人々の盲目。何が悪い、どこが悪いと国

の中に居る者は指摘出来ない。恐らく、すぐるような思いで、大臣たちは禁を犯した。

異世界から、この国を救うといわれる不幸な女神を招くという暴挙を。

慶諾は、憐れむように辞令と一緒に入っていた金札を見つめていた。

異世界から来たというから、きっと知りはしないだろう。

たとえ、興味を持ったとしても、誰も教えはしないだろう。

その金札という、金に換金できる札に書かれた金額が到底、遠方へ嫁ぐ花嫁の支度金とは思えないほど小額だということなど。これでは、新しい衣装どころか花嫁衣装すら仕立てられない。ただ宿へ泊まり、南概へ行くためだけの旅費で消えることだろう。

朋来は、南概という行先だけに光明を見出していた。

その土地を治めているのは、朋来のよく知る人物だったのだ。

だっておかしいだろう（後書き）

一度投稿しましたが改訂したものを載せなおしました。話の筋はまったく変わっておりませんが、付け足した部分もあります。

待ってたの？

謝ることなど、ましてや憐れむことなど決してしない。

だが、迎えに行った朋来はその衣装箆笥の軽さに驚いた。

女性の、それも身分ある女性の衣装箆笥など、男一人で抱えられるものではない。近衛の誰かに手伝わせなければならぬかと不安を覚えていた朋来は、別の意味で不安になった。

なぜ、朋来一人で持ててしまうのか。

嫌な想像をした。だが、しかし、と考え直す。

普通の、本当に市井の娘ならばこれぐらいの衣装だろう。身一つで嫁ぐのだから、旅に必要なものと、花嫁衣装さえあればいい。

そう思うことで朋来は自分を納得させた。

最後だからと女官たちに控え目に着飾られて出てきた女神さまは、少しばかり背の高いだけの幼い少女だった。

長い黒髪に黒い瞳、華奢で、そしてそれだけの少女だ。背が高いといっても朋来の肩より下に頭がある。

愛想程度の挨拶を交わして、馬車に乗り込ませると物珍しげな視線が馬車の窓から覗いていた。恐らく、彼女が王宮の外へ出るのは初めてのことなのだ。

これから自分の振りかかえることを半分も分かっていないのだろうか。

御者も付けられなかった一頭立ての馬車を、慶諾に合図して、おそらく彼女の世話をしていた者と女官長だけなのだろう見送りを後にした。

慶諾は、朋来が辞令を受け取った翌日には大隊の隊長を勝手に辞めてきてしまった。その手早さに呆れた朋来だったが、慶諾が見た目よりも心配症で、そして女神さまにも興味を持っていたことは分かっていたので、何も言わずに護衛を共にすることにした。彼の辞職願が聞きいれられたとも思えないので、この任務が終われば、すぐに

王宮へ返せばいいだけの話だ。

意図してなのか、慶諾は馬車を王宮の外壁に沿うようにして走らせて、隠れもせず外を覗き込む女神さまの好奇心を満たしてから、王宮の外へと出た。

街を初めて見るのだろう。

けれど、彼女の姿を晒しながら馬車を走らせるわけにもいかない。ので、気の毒とは思いつながら馬で追隨していた朋来は馬車に並んだ。「失礼」

声をかけると、驚いたように黒い瞳が丸くなった。朋来は今、衣装なので兜の下の髪までは見えないだろうが、瞳の色が見えてしまったのかもしれない。

「あまり乗り出されては危のうございます。お控えください」馬蹄の音にかき消されない程度の声で言うと、不機嫌な顔になった女神さまはぴしやりと音が鳴るほど勢いよく窓を閉めて、日除けでそれを覆った。

やはり、異世界であろうと朋来の色は異質なのだろうか。

生まれたときから付き合ってきた迷信に近いこの偏見に、今更何か思うこともないが、もし朋来の髪色が恐ろしいなどと思われているのなら、このさきの数週間は彼女にとっても朋来にとっても気の重い旅になる。彼女も朋来も、この旅を放り出すわけにはいかないのだから。

しかし、ふと視線を感じて馬車の窓を見ると、黒い瞳がこちらをじっと見ていた。

朋来と目があうと、慌てて馬車の中へと引っ込んでしまう。

まだ、子供なのだ。

そのうえ右も左もわからない異世界に放り出されて、また、わけのわからない場所に連れていかれようとしている。

朋来は閉じられた窓を見ながら、溜息をついた。

それから、休憩を挟みながら夕方近くになって少し大きな街の宿

につく頃、再び女神さまの様子を伺うと、驚いたことに彼女は気持ちよさそうに眠っていた。

馬を預けて帰ってきた慶諾が「肝の太い姫さんだ」と呟いたが、朋来は苦笑するに留めて慶諾に宿の部屋を用意させるよう頼んだ。出会ってわずか一日目だ。

知らない部屋に連れ込まれては、彼女はきつと驚くだろう。朋来はそのまま馬車の隣で彼女が起き出すのを待つことにした。街の中でも上等なこの宿の車止めは馬車が一台ずつ入るようになっていて、人目はない。

朋来は一日被り通しだった兜をとった。

普段、街へ出る時には帽子を身につけている。出仕の時も冠を、私事では日除けのついた笠を身につけるので、朋来が銀の髪だと知る者は少ない。

戦の時は兜を被るために帽子をかぶるわけにもいかないのが、部下たちは朋来の髪色を知っているのだ。

男も女も僧籍にでも入らない限り髪を切ることはないが、朋来は髪色のこともあって髪は常に襟足で整えているので、初めて朋来を見た者はほとんどが軍人だと思わない。

(……瞳の色までは変えられないのですが)

日の光によって色は変わるが、気付く者は気付く銀色の瞳。

髪ほど目立つわけではないが、気付かれてしまつと一様に気味悪がられてしまう。

(自分で思っていたよりも、厄介な任務になりそうですね……)

楽観していたわけではないが護衛など楽な仕事だと思っていた。だが護るべきはずの相手に怖がられてしまつては本末転倒だ。

久しぶりの旅の疲れもあって朋来は深い溜息をついた。が、小さく馬車の戸が開く音がして驚いて振り返る。

馬車から、小柄な少女がこちらを眺めて目を丸くしていた。しまった、というには遅すぎる。

どうしようかと思案を巡らせたところで、少女の方が朋来の方へ

と駆け寄ってくる。

「待つてたの？」

はいともいいえとも言えず、朋来は兜の端を握った。被り直した方が良いのだろうか。

しかし、女神さまの方は特に気にした様子もなく、答えない朋来に続ける。

「私、寝てたのね。ごめんなさい。街に着いたの？」

再び尋ねられて、朋来はようやく「はい」とだけ答えた。

朋来は本来、愚鈍な男ではない。だが、今は黒い瞳に何の蔑みも見られないことに困惑していた。

この髪色が恐ろしいのではないか。

しかし、少女は平気な顔で朋来を見つめている。

それが不思議でたまらなく、逆に朋来の不安を煽った。

この年端もいかない少女が、唐突に得体のしれないものに見えた。応えたもの一向に動こうとしない朋来に、少女は困ったように首を傾げる。

「どうしたの？」

「申し訳ございません」

絞り出すように朋来は言葉をひねり出す。

ますます訳が分からないというように、少女はとうとう呆れたような顔になった。

「どうして謝るの？」

「お見苦しいものを、お見せし…」

「だから、何を？」

たどたどしい朋来の口調が気に入らないのか、少女は思い切り眉をしかめた。

「あなたはいつたい何を謝っているの？」

そう問われ、朋来の混乱はますます極まった。
なぜ。

問いたいのはこちらの方だ。

どうして、この髪色を恐れない。

「もしかして、そんなに私の護衛をするのが嫌なの？」

朋来は、目の前の得体の知れない少女を見た。

愚かだと、聞いていた。

今代の女神はただの愚かな少女だと。

言葉も分ならず、ただわがままを繰り返すだけの。

しかし、目の前の少女をその噂とあてはめることは出来なかった。とても静かな理性的な黒い瞳が朋来を不審そうに見つめている。

朋来はその理知の光に促されるように、普段の落ち着きを手繰り寄せた。

「申し遅れました。わたくしは、朋来と申します」

質問に答えないうままの朋来を不思議そうに眺めて、それでも少女はうんと頷いた。

そこへ、遅い二人の様子を見に来た慶諾がやってきたので、朋来はこちらへと招く。

朋来が兜をとって髪をさらしていることに珍しく驚いたようだったが、慶諾は朋来の隣に立った。

「こちらは慶諾と申します」

紹介すると、慶諾は無愛想に頭を下げてただけだった。

それに苦笑しながら、朋来は改めて目の前の少女に向きなおる。

「我々二人が、あなた様を南概までお連れいたします。礼儀も知らぬ不調法者ですが、これから二週間ほどよろしくお付き合いください」

朋来は慶諾と片膝をついて礼を取った。が、頭の上から降ってきたのは、

「二週間!？」

今まで静かだったはずの少女の、素っ頓狂な声だった。

彼女は、マユと名乗った。

思えば女神さまの名前など、ほんの一部の人間しか知らない。

朋来たちが知るすべなど無かったのだ。

心配いたしましたよ

翌日の彼女は慣れない旅のはずなのに、元気だった。

馬車の窓から顔を出して並んで馬を走らせる慶諾に話しかけている。

今日は朋来が御者だ。

「ねえねえ、水色の髪ってすごいわね」

「次の街ってどんなところ？」

「どうしてそんなにだらしない格好なの？」

慶諾は「ああ」とか「そう」など生返事だが、彼女は気にせず質問を投げている。

あの元副官は、顔形の悪いところなどない男だが、いかんせん愛想というものが無いので女子供には怖がられる。

(……忌色よりはマシなのでしょうが)

昨日の静かだった馬車を思い出しながら、朋来は自分に苦笑した。今更、何を。

延々と続く野原の一本道は穏やかで、天気もいい。

地図の上ではもう少し行けば木陰のある林があるので、朋来は休憩をとることにした。

馬車の窓越しに一方的な会話を続ける二人にそれを告げ、馬車を止める。

馬を荷台から外して、水をやっていると物珍しげに林を眺めている少女がこちらへとやってきた。

今日は、白い衣装は汚れるからと淡い草色の着物で、一人でも着られるそれをまとった彼女は、本当に普通の少女だった。

「今度、宿を取る街って面白い街なんだってね」

気遅れも気遣いも見られない様子で、彼女は馬と朋来を珍しそうに見て少し笑った。

「面白い、といますか、歓楽街がありますね。夜遅くまで屋台が

二の句を継げない朋来をよそに、こちらの様子を伺っていたらしい慶諾が驚いたことに腹を抱えて大笑いした。

彼があればと笑うところなど、付き合いの長い朋来でも見たことがなかった。

渦中の少女といえば、不思議そうに男二人を見比べていた。

話題の街についたのは、昨日と同じく夕方に近くなってからだった。

馬車の置ける大きな宿を探し、ようやく部屋へと少女を案内した頃にはすでに日は落ちかけていた。

「夕食はどうなさいますか？」

「お風呂に入ってもう寝るよ」

貴族を主に泊める宿の部屋割りには、護衛と部屋は一緒だ。広い部屋には二部屋あり、主と護衛がいつでも行き来出来るようになってる。

しかし、今回の宿には風呂はついているが大浴場があるという。

彼女は広い風呂に入りたいと言うが、さすがにそこまでついではない。仕方なく慶諾と朋来は風呂の外で待機することにした。

だが、いつまで経っても問題の少女は出てこない。

おかしい。

しかし彼女の荷物はすでに部屋へと入れてある。

着替え以外は身一つで風呂へと入った彼女に良くないことを考えるとも、起こると思えなかった。

慶諾と相談して一度部屋へと戻ってみようということになり、部屋の手前まで戻ってみると、見知らぬ少年がうろついている。

「どうした？」

黒髪の少年に慶諾が声をかけると、明らかに肩がびくりと揺れた。慶諾は無愛想で初対面の子供には受けが悪い。だが、朋来と違って、ただけた兵装の慶諾に少年は安堵したようで、彼は取り繕うように不安そうに辺りを見回した。

「迷ってしまつて…」

着物を見る限り、平民の子供だ。小間使いがよく着ているような質素な服。この宿の者だろうか。

「そうか。この廊下を行けば外へ出るぞ」

慶諾がそう言つと、少年は嬉しそうに肯いて礼を言つて去ろうとする。しかし慶諾の後ろで控えていた朋来の隣を彼が横切るとき、既視感を覚えた。

黒髪、朋来の肩より低い背。

少年は、顔から読みとつた年の割には華奢に見えた。

朋来は咄嗟に叫んだ。

「慶諾！ その子をつまえてください！」

朋来の声を聞いて、少年が「あ！」と駆け出す。だが大人の、訓練を積んだ慶諾の足には敵わない。

少年の腕を捕えて朋来の前へと連れてきた慶諾は、半信半疑に少年をこちらへ突き出した。

「……マユさま」

腰をかがめて覗きこむと、少年、いや少女の顔が驚きと共に大きく口を開けた。

「……どうしてわかつたの」

慶諾は目を瞠るが、朋来は大きく溜息をつく。

「……心配いたしましたよ」

少女の顔は驚いた顔から渋面に変わり、拗ねるように口を噤んだ。「なぜ、このようなことを？」

「……街に」

「街？」

「街に行つてみたかつたの」

ああ、と朋来は昼間の会話を思い出した。朋来が、夜には屋台が出るのと教えたのだ。その時の好奇心に満ちた瞳。

朋来は「わかりました」と告げて、慶諾に向きなおつた。

「お連れしてあげてください」

良いのか、と目で問いかけてくる慶諾に肯いて、朋来は再び少女の前で腰をかがめた。

「いいですか。あまり遅くならないように。必ず慶諾と一緒に行動してください」

まるで宝物を差し出されたように、少女の顔がみるみるうちに輝いた。

「いいの？」

「ええ」

これがいけなかった。

条件があります

「マユさま！」

それから、街へ着くたびに彼女が部屋を抜けだすようになってしまった。

朋来と慶諾でそれを見咎めるたびに、買い物に行きたかった、あのお店に入ってみたい、と。馬の飼葉を買いに立ち寄った街で馬車を抜けだすという荒業もやってのけた。

王宮でいかに彼女が大人しく過ごしていたのかを身を持って知った思いだった。

そして今は、

「どうして、馬になど乗ろうとしたのですか！」

朋来と慶諾が荷物の確認と同時に旅の行程を確認している最中にそれは起こった。

彼女が勝手に馬を放して無理矢理、鞍によじ登ろうとしていたのだ。

旅はすでに一週間を過ぎ、旺盛過ぎる少女の好奇心は旅を始めた当初から珍しげにしていた馬にも及んだ。馬に触ってみたいというので、慶諾と朋来がついている時だけと厳しく言い聞かせていた、はずだった。

馬の方は大人しい部類の性格だったため、暴れもせずただ迷惑そうに少女の奇行を嫌がっていたようだ。彼女が鐙に足をかけたところでそれ以上よじ登れずにいることも幸いして大事には至らなかった。が、

「あれほど注意したでしょう」

荒くれ者の兵士達を一喝で従わせる朋来が、これほどまでにたった一人の少女に振り回されるとは。もはや憐れな少女というよりも、じゃじゃ馬のお姫さまを連れてくる気分だった。

「だって、乗ってみたかつたんだもん」

「だってではありません。落ちて首を折る者が年に何人いるかご存じですか」

たとえ馬に慣れた兵士であっても、落馬すればただでは済まないのだ。打ち所が悪ければ死に至る。

さすがに落馬するのは怖いと感じたのか、彼女はうつと口ごもる。

「馬は、見た目は私たちよりも大きい生き物ですが、とても気難しく繊細な生き物なのですよ」

諭しながら、朋来は馬が彼女に心を許し始めていることを感じていた。毎日、慶諾のあとについて見習いの護衛士よりも熱心に飼葉を与えたり、水を与えたりして世話をしていたのだ。朋来にもいくつもの質問を投げかけてきていた。

それで、この事態だ。

「馬に、乗りたいのですか？」

すでに腰をかがめて彼女と視線を合わせることに慣れた。

彼女がぱつと顔を上げることに。

「休憩の時間、そして馬があまり疲れていない時に乗せて差し上げます。ですから、一人で乗ろうとは絶対にしないでください」

でなければ、宿へついたら部屋に鍵をかけてしまいますよ。

この一言が効いたのか、それ以降、彼女が勝手に出かけることも、馬に乗ろうとすることも無くなった。

この頃には、街へ着くたびに三人で観光へ繰り出すようになっていた。

慶諾が時折面白がるように、彼女と一緒にになって賭け事に興じたり、的屋へ連れて行くので（慶諾という男は大貴族でありながら場末の遊びに通じている）それに溜息混じりに後からついていくようにもなった。

今日も、たどり着いた街で露店を物色する彼女に付き合っ、街路をのんびりと散歩していたが、

「決まりませんか？」

露店の小間物屋でかれこれ一時間以上は唸っている彼女に、朋来は声をかけた。慶諾はすでにこの待ち時間に飽きて夕食を食べるための店を探しに出かけている。

夕暮れも近いためか人通りはあまりなく、そのためか小間物屋の人の良さそうな店主はいつまでも張り付いている客を追い出そうとはしなかった。

それというのも、すっかり街の少年のような質素な装いが身につけてしまった我らがお姫様が一つの髪飾りを手にずっと悩んでいるのだ。

あまりに必死なので朋来だけでなく、店主も声を掛けづらかったに違いないが。

少女の手元を見ると、小振りの髪飾りが乗っている。

鳥が羽ばたく意匠の、珍しいといえば珍しいがさして高いものではない髪飾りだ。

王宮では、この小間物屋に並んでいる商品がたった一つの小さな耳飾りで買ってしまうようなものが彼女の周りに溢れていたというのに。

「……欲しいのですか？」

控え目に、しかしはつきりと朋来が指摘すると、ようやく顔を上げた彼女の目が所在なさげに泳いだ。

その様子に朋来がちゃんと答えるように目を細めて促すと、観念したように少女は溜息をつく。

「欲しい。けど、これを買ったら、ちよつとね」

苦笑するお姫様は、王宮でただ過ごしていたわけではない。観光にお供するようになってから、朋来は予想外に彼女のこちらの世界での経済観念がきちんとしていることに驚いた。

彼女は、衣食住以外の雑費をほとんど自分で出す。

初めは宿代さえ自分の分は出すと言いだしたが、値段を教えてやるとすこすこと引き下がった。彼女に払える額ではなかったらしい。というのも、彼女の持っている金は、驚いたことに彼女自身が働い

て得た金だというのだ。何をして得たのかを朋来が根気よく説得して（ほとんど脅すように、とは慶諾の言だが）聞き出すと、なんと王宮で小間使いのまねごとをしていたという。見習いの女官に金を渡し、遠い親戚だと偽ってもらい、下女の仕事を得たという。身分を偽ることは犯罪だが、身元を保証されない限りは王宮で働くことなどできなかつただろう。それに、彼女には異世界から来た客人というだけで、明確な身分というものが無いも同然だった。

今着ている質素な着物も沓も自分で働いた金で買ったのだと、少し照れながら言われて結局朋来は怒ることなどできなかつた。

しかし、この旅で物珍しさも手伝つてか彼女は自分で思つてもみないほど散財をしたらしい。行程も半分を過ぎ、あと幾つかの街と関所を経れば目的の南概へ着く。

「条件があります」

唐突に切りだした朋来を不思議そうに少女は見上げた。

「これから先も、一人で街に出かけたりしないこと。馬に勝手に乗らないこと。慶諾に連れていかれたからと言って酒場などに出入りしないこと。だからだと夜更かししないこと。朝は一人でちゃんと起きること。それから……」

「ちよつと待つて！ いきなり何なの！」

幾つもの条件に驚いて少女が叫ぶとほとんど同時に、朋来と彼女の後ろから笑い声が響いた。

「 姫さんに買ってあげるつて言つてるんだ。それ」

戻ってきたらしい慶諾がまだ笑いの余韻の残る顔で二人の元へやってくる。大笑いの主は彼だったらしい。

笑うことなど珍しいはずの慶諾が、彼女の前ではまるで子供のように朗らかに笑う。朋来と出会ったころには表情どころか感情すらもどこかへ置いてきたようだったことを思い出せば、目をみはるような変化だった。

「え？ これ？」

慶諾が指さしたのは彼女が睨みあっていた髪飾りだ。

「そんな、悪いよ……」

心底難しい顔をする少女に、慶諾と朋来は思わず顔を見合せた。今でこそこんな護衛士の末端に居るが、慶諾と朋来は本来ならば將軍職にあつた者たちだ。慶諾に関して言えば家格は大貴族、朋来にしても縁者は既に居ないがそれなりの家の当主だ。王宮暮らしほどではないにせよ、彼らが小娘一人の買い物で不自由するほどの懐ではない。そんな事情を知らないとはいえ、大の男二人の懐具合を心配している少女。

朋来と慶諾は、互いの顔が情けなく緩んでいることが面白く、未だ気難しい顔でこちらを睨んでいる彼女がおかしくて、声を上げて笑った。

「あつはつはつはつはつは！」

「何がおかしいのよっ！」

とつとつ顔を真っ赤にして怒鳴り出した彼女をなだめるべく、朋来は口元を手で覆いながら弁解した。

「いえ、おかしくなど」

「そう言いながら笑わないでよ！ こつちにしたら死活問題なんだから！」

髪飾り一つで天地がひっくり返るとも思えないが、彼女にしてみればそれほどのことなのだろう。

「いいでしょう。私たちからの贈り物としてあなたに差し上げます」

「え？」

朋来の提案に呆けた少女の顔がまたおかしくて、朋来は口元を綻ばせた。

「ただし、先ほどの私の条件を呑んでくださるなら」

「いいの!？」

きらきらとした顔が朋来を見上げてくる。

その顔に、朋来は否とは言えない。

朋来一人で金を出そうとすると彼女が存外に渋るので、朋来と慶諾の折半で髪飾りを買うことになった。

小間物屋の主人に「良かったねえ」と言われて嬉しそうに肯くと、彼女は手に入った髪飾りを夕食の間も返す返す見つめては嬉しそうに笑った。

その様子を眺めながら、朋来は自分の義妹の成年式に送った腕輪のことを思い出した。

すでにそのころには朋来は護衛士見習いとして王都に居て、里帰りした時にはその腕輪をいつもつけていてくれたことを覚えている。その里帰りも、朋来の遠征が多くなるにつれて少なくなり、悲劇へと向かう彼女を止めることができなかった。

彼女は、この目の前の少女のようにあの腕輪を喜んでくれたのだろうか。

遺品を整理したものの、結局その腕輪は見つからなかった。

夕食の支払いをしようと店員を呼びよせると、明るい光があったらしい。

店員は小さく悲鳴を上げた。

「忌色……」

朋来の瞳を銀色と知ったらしい。

朋来は目を細めて店員を黙らせて、卓の上に金を置いた。

すでに席を立てていた慶諾と少女を追いかけていく朋来の背中を、店員の畏怖が店を出るまで追いかけてくる。

出入り口で少女と一緒に待っていた慶諾は店のおかしな雰囲気気が付いたようだったが、何も言わずに店を後にした。

騒いだところで意味のないことだ。

朋来は明日にはこの街にいない。

腕輪を受け取ってくれたはずの義妹も、もうこの世にはない。

「マユさま」

夕食からの宿への帰り道、夜道を嬉しそうに歩く彼女に朋来は思わず声をかけた。

振り返る少女の行く先だけを、朋来は希望にしている。

「髪飾り、つけてみせてくださいね」

驚いた顔をしたものの、恥じらうように笑った少女を南概へ連れて行く。

それだけが、朋来の希望だった。

それが、この不幸な少女の、不幸であっても。

しかし、朋来はそれを目の当たりにして眩暈がする思いがした。

失礼なお姫様です

その日も朋来たちはいつもと変わらず馬車を走らせていた。今日も朋来が御者を務め、三人だけの花嫁一行は深い森へと差しかかっていた。

淵の森と呼ばれるこの森は、南概へ向かうまで唯一の深い森だ。開拓を容易には許さない大木の並ぶ、この広大な森は馬車がやっと通るだけの道幅があるだけで、その道をそれれば慣れた者でも抜けることはかなわない。徒歩の旅では一日で通り抜けることはできないので、馬車を使う商隊や貴族が使う裏道として知られていた。しかし、彼らもよほどのことがない限りは使わない道だ。昼でも灯笼に明かりが必要なこの薄暗い道を抜けることは、決して安全とはいえない。

本来なら、この危険な道を選ぶなど護衛としてはしないことだ。だが、この道だけは外すなと指示され、不本意ではあったが朋来は馬車を向かわせた。

行程表を見た慶諾はこれまでの安全な道とは違う経路を訝しんだが、何も言わずに組み込まれたそれに従ってくれた。

「隊長」

慶諾の短い呼びかけに朋来は馬車を止める。

馬車と並行に馬の足を止めた慶諾は鋭く辺りを見回している。

囲まれた。

暗がりには何かが、何者かが幾人も潜んでいる。

緊張をはらんだ空気に馬が震えてわななく。

御者台を降りて馬首を撫でて宥めながら、朋来は箱馬車の車台を覗き込む。

いつもより朝早くに出発したからか、お姫様は座席に寝転んで眠りこんでいる。

朋来は座席の日除けを引こうと静かに車台の戸を開けた。

起きる気配は無かったが、ふと彼女の手元を覗いて笑みがこぼれる。

彼女は今日も飽きずに、朋来と慶諾が贈った髪飾りを眺めていたらしい。石を彫り込んだ細工物なのでそう簡単に摩耗しはしないだろうが、子供が気に入りのおもちゃを片時も手放さないように握りこんで赤ん坊のように眠っている。

朋来は日除けを静かに引いて、音をたてずに車台に鍵をかけた。そうしてしまえば、馬車の中までよほどの音以外、外の音は漏れ聞こえない。

そうして振り返った朋来は、笑みを湛えながらも凍えるような空気を纏った。

慶諾はその朋来の様子をちらりと横目で見てから馬から降りて、手早く戒めを解いた二匹の馬首を叩く。

「行け！」

馬は主の言う通りに薄暗い小道を駆け抜けていった。それが合図だった。

その瞬間、慶諾の剣が甲高い音と共に瞬く。

雷光のような軌跡を描くのは、投げるに特化した投刀。それが木々の隙間から狙い澄まして朋来達に飛来する。

短い掛け声と共に慶諾は投刀を打ち払い、車台の前に立ち塞がる。投刀の手玉など限られている。

すぐに現れた人影に、朋来は勢いつけて走りこむ。

一瞬。

ほとんど黒い装束の中から得物を抜くことすらさせず、朋来は剣を滑らせた。

滑らかに、しかし胴のほとんどを叩き斬るほどの膂力で斬りあげられ、剣先から遅れて血飛沫が舞い上がる。

数瞬で崩れる味方にわずかに躊躇った隣の黒装束も、朋来の剣が首を掻く。

斬りかかる方が遅れをとるほどの早さで、いずれの得物も朋来と

剣を合わせる間もなく地に伏す。

その様子に茂みがざつとざわめいたかと思うと、相手を確実に仕留めようと今まで様子を伺っていた者たちがほとんど全員で朋来と慶諾に斬りかかってくる

困む黒装束をほとんど一刀に斬り捨てて、朋来は返す刀で剣ごと腕を刈り、逆手に斬りかかる腹を蹴り飛ばす。

その足を狙った投刀を無視して次の獲物にかかるうとして、朋来の兜が反動で宙を飛んだ。

「……銀獅子！」

誰かの低いが、驚くような声が聞こえた。

生臭い風に煽られて、朋来の短い銀の髪が揺れる。

血に濡れた刃が声の主を屠るのに、そう長い時間はかからなかった。

朋来の耳に合図が聞こえたのは絶命した体が力なく倒れる頃だった。

黒装束達は仲間の死体をそのままに、潮が引くように再び暗い森へと消えた。

「隊長」

短い、先ほどよりも落ち着いた呼び声に朋来は血の滴った剣をそのままに振りかえる。

足を切りつけられ、押さえつけられているので動けない黒装束を足の下に敷いた慶諾がいつもよりも感情のない顔で朋来を促した。

「必要ありません」

朋来の応えに、慶諾は朋来と同じように血が滴り落ちる剣で黒装束にとどめを刺した。

短い苦悶を聞き届けてから、朋来はざつと周囲を見渡す。

すでに人の気配はない。

よく訓練されている者たちだ。

剣の血を払って鞘におさめると、同じように剣を収めた慶諾が物問いたげにこちらを見つめていた。

その、訝るよりも責めるような視線から朋来は意識を逸らせて、死体の周りに転がった自分の兜を拾い上げた。

貫通はしていないが投刀が兜に突き刺さり、土と血に薄汚れている。朋来が近衛に配属されてから使っていたものだが、もう使えない。

矢など射かけて来なかったところをみると、兵士や傭兵ではない。玄人の暗殺者の類だ。

残された投刀の刃の部分は光に淡く光っていた。車台や御者台に突き刺さったはずのものは抜き去られていたが、傷痕はわずかに溶けている。毒が塗られているのだ。ああいう者たちは得物を残したからないが、朋来の兜に刺さったものまで抜き取る余裕が無かったのだろう。

「隊長」

多少の苛つきも含んだ再度の呼びかけに、朋来はようやく慶諾に向き直った。

「大臣たちの手の者です」

「大臣？」

動かないはずの慶諾の眉がしかめられた。

慶諾の不愉快さは朋来にも理解できた。そもそも彼女は、大臣たちの企みによつてこの世界へと落されたのだ。

「私は、この道を通り、襲撃を返り討ちにせよと命を受けました」

「あんた、この護衛を任されること、辞令が出る前から知っていたな？」

問いかけではあるが確信めいた慶諾の言葉に頷きもせず、朋来はもう役にはたたない兜に目を落とした。

朋来が今回の護衛を命じられたのは、辞令よりも前に送られてきたとても個人的な手紙からだった。

役立たずの女神を妻にと望んだ、南概の領主その人からの。

彼は、明即といい、辺境の土地、南概の主で、今代陛下の腹違いの兄にあたる。

腹違いといつても容姿は陛下とことごとく似ている。が、その気性はまるで正反対だ。

弟の崇鵬は不正や不実を嫌う清廉潔白な性質だが、兄の明即という男は、毒すらも身のうちに呑みこんでしまうような、良い言葉を選べば治略の天才、悪い言葉で表せば、奸雄だ。

表面上はとても穏やかで温厚な人格者に見えるので、彼の狂暴なほど清濁併せ呑む性質を見抜いている者は少ない。

朋来も、幸か不幸かその一人だった。

女神と呼ばれる少女を知った今となってみれば、正直なところ好き好んで猛獣の前に何も知らない小動物を置くような真似はしたくない。

だが、彼女の今後を守ることが出来るのは、王という絶対支配があるこの国で、王の他に明即しかいなかった。

だから、不承不承ながらもこの危険な命令の腕を買ってわざわざ護衛につけたのだろうが、

「今回の襲撃をあえて退けさせたのは、恐らく大臣たちへの牽制でしょう」

そもそも暗殺者に襲わせるということ自体を避けることなど、あの男ならば造作もない。それをわざわざ危険な道を通り、襲わせたのだ。彼は常人には理解しがたいほどの酔狂だが、意味もなく死体の山を築く間抜けではない。

しかし、実際に血の海の中に立っている朋来たちにしてみれば、彼も狂人の類であることに違いはない。

「血など服や鎧についてはいないが、血の臭いは目立つものだ。マユさまが起きられる前に、すべて片付けてしまいましゅう」

納得のいかない顔をしている慶諾を尻目に、朋来は馬を呼びよせるべく、指笛を吹いた。

馬が戻ってくるまでに、朋来たちは剣や剣帯など以外の衣服と死体を全て燃やし、森へと捨てた。傷ついた車台は次の街で変えるこ

とにして、辺りに未だ漂う血の臭いに怯える馬たちを宥めながら森を抜けた。

朋来はいつもの兜を荷台に放り込んで、街へ行く時に身につける帽子をかぶることにした。

太陽が中天を過ぎたほどに森を通り抜けると、ようやくいつものような野原へ続く道へと出る。

爽やかな風を受けながら、しばらく馬車を走らせて、途中の林で休憩を取ることにした。

少し遅いが、昼食がまだだ。

朋来が馬車に呼びかけると少女が眠たそうに応えた。

「いい天気だし、あそこで食べようよ」

昼食だと知った彼女が指したのは、草原が見える丘だった。

こうした提案は初めてはない。林からもほど近いので、慶諾も肯く。

朝、宿屋で包んでもらった昼食を荷台から出し、まだかまだかこちらをうかがっている少女に朋来は釘を刺した。

「丘から降りてはいけませんよ」

丘から向こうに広がる草原は見た目ほどたやすい場所ではない。

風が通り過ぎるたびにざわざわと波のように鳴る草原の草は、実は人の背丈ほどもある。一度入り込んでしまうと、天然の迷路のように行き先を見失ってしまうのだ。

三人で丘の崖に腰掛けると、昼食にと持たされた野菜と肉を包んだ面包の包みを開けた。

少女の、次の街についての質問に答えながらあつという間に昼食を終えると、彼女は大きく伸びをした。

「ねえ、朋来」

「はい」

「兜じゃないの、珍しいね」

いつも旅路の時には兜だ。要人の警護の者だけが身につけているわけではなく、一般の貴族や豪商の護衛も兜は見につけるので珍し

くはない。武人だと分かるだけでも、要らぬことを考える者たちへの牽制になる。

そうしたことを察しているのではないだろうが、少女は事もなげに朋来の帽子を眺めた。

「帽子より涼しいでしょう」

「そうでもありませんよ」

「だったら脱げばいいのに」

時々、答えにくいことを尋ねられることが多くなった。

他愛もない知識ならば応えられるが、こつした因習めいたことを尋ねられると答えにくくなる。辞令の時に渡された、明らかに額の少ない金札の意味も朋来は教えられないままだった。

知らないでいるといいと思う。

けれど、彼女は知りたいと思うだろう。

そういう少女だということぐらいは、知った。

「どうして脱がないの？」

尋ねられると黙っていた。

真つすぐにこちらを見つめる黒い瞳に、朋来の禍々しい姿が映っている。

黙ったままの慶諾が、朋来を伺っている。

それでも、朋来は言えなかった。

知らない世界に放り出された拳句に、命を狙われていることなど、知られたくもなかったし、朋来の口から告げたくもなかった。

だから、別のことを教えてさしあげよう。

「銀色というものは、忌み嫌われる色なのですよ」

不思議そうな黒い瞳が朋来を見上げている。

その瞳に嫌悪が宿ることになるのだろうか。

何も知らないからこそ、奇麗だと言ったその口で悲鳴を上げるのだろうか。

「謂れは私も知りません。虐殺した王族の末裔だとか、罪人の色だとか、色々なことが言われておりますが、銀色というものは、とに

かく嫌われる色なのですよ」

自嘲気味に朋来は帽子をとった。

慶諾が軽く息を呑んでいる。しかし、目の前の少女は、

「ふうん」

頷いただけだった。

そして、

「珍しいっていうなら、私にしてみたら慶諾の方が珍しいよ」

大貴族の慶諾を指してそんなことを言った。

これには、朋来も思わず黙った。

「私にしてみたら、それだけのことだけど」

それだけ。

朋来はそれだけのことでこの世に生を受けたときから疎まれた。

朋来が化け物だというのは、目の前の少女はいったい何なのだ

ろう。

物知らずな娘のことを、朋来は笑えない。

彼女の言う通り、本当に朋来はただ銀色の髪と瞳を持ったという

だけだ。

「朋来が嫌われるなら、私が嫌われても仕方ないね」

彼女がじつと見ているのは、車台の刀傷だった。

異世界から来た。

たったそれだけのことで、彼女は殺されかけた。

「朋来の髪、奇麗だよ」

再び黒い瞳が朋来を映した。

笑うことに失敗したような、情けない顔だ。

「慶諾と私が居るところなら、帽子なんか脱いでおきなよ。将来禿

げるよ」

からかうように笑う。

その笑顔を見ていると、朋来は悲しくなる。

「まったく、失礼なお姫様ですね」

何の違いがある。

養父がいつか朋来に言った言葉だ。
本当に、何の違いがあるのだろうか。

目の前の少女は、ただ生きて、笑っているだけだというのに。

あれから幾日か過ぎて、行程はあと一日を残すところとなっていた。

初めてのころに比べれば、大人しくなった我らが姫君さまを連れて旅をすることも残り僅かだ。この峠を越えれば、南概に至る。

それは、本当に偶然だった。

休憩に荷を確認していた朋来は、半開きになった箱を見つけた。

彼女の衣装箆笥だ。

やれやれと肩を竦めて閉じようとしたのがいけなかったのか。

その中身を偶然目にして驚いた。

何も無いのだ。

彼女が王宮から持ち出して気に入っていた肩掛け、いつも着ている少年のような質素な着物が数枚、沓が二足、普段着用の着物が数枚に、王宮を出てきた時に来ていた衣装。

これだけだ。

王宮で見につけていたはずの豪華な着物も、宝石もないどころか。

(なぜ……)

朋来は珍しく頭に自分の血の上る音を聞いた気がした。彼はいつも怒りに任せて行動などしない。それは持って生まれた色のせいでもあったし、そういう性格のためでもあったが、今までそういう場面が巡ってきたことがないせいでもあった。

怒鳴るように呼んだ。

驚くように顔を出したのは慶諾だ。

どうしたと尋ねられる前に、朋来はどうか自分の感情が暴発しないように抑え込む。

「マユさまを連れてこい」

いつもとは違う様子の朋来を見てとり、慶諾は無言で頷いてその場を離れていった。

朋来は再び箆笥に目を落とす。

なぜ。

やり場のない怒りと共にその問いばかりが頭を駆け巡る。

なぜ、あんな少女がこんな目に遭わなくてはならない。

衣装箆笥の中には、花嫁には必ず持たされるはずの花嫁衣装が無かった。

幸せにおなりなさい

その戦の勝敗は、ほとんど絶望的だった。

宣戦布告も行われたかどうかさえ怪しいほど、その戦は唐突に始まった。

以前から領土争いに躍起だった隣国が、突然国境を越えたのだ。

ここ数年、小競り合い程度の戦は続いていた。だが、名のある將軍が何人も軍を率いてくるような戦はここ数百年ないことだった。

比較的温厚だった王から好戦的な王へと代替わりしてから、軍備に隣国が力を入れていたことは知られていて、他の国境よりも精銳ばかり揃った幾つもの守備隊が置かれており、それを知っていたはずの隣国も目立った侵略行為は控えていたはずだった。

それが、一つの砦が突然の奇襲に落されるといいう形で、その微妙な緊迫関係は一息に崩れ去る。

ほとんどなし崩しに戦場は拡大し、付け焼き刃に他の地域の守備隊がかき集められたが、全てを整えようと攻め込んだ相手に対抗できるはずもなかった。

援軍の要請を受け、この戦場よりも以西にある山麓の砦に配属されていた朋来が部隊を率いて到着した頃には、戦場は泥沼化の様相を呈していた。

兵糧はろくに届かず、昼夜を問わず激化していく戦場に、兵だけでなく將軍までも離反する者や脱走者が相次いでいた。

すっかりやつれた見知った顔もあったが、朋来の目の前で先立っていった。

そんな最中、一人の司令官がやってきた。

彼を知る者はあまり居なかったが、朋来は知っていた。

しかし、彼のような者が前線にやってくるのが不思議でならなかった。

直系の王太子でありながら、継承権を早々と放棄し、南概の領主

に収まった才物だ。荒れて貧しかったかの土地を当時、弱冠十七歳の領主はみるみるうちに再生させて、今や国内でも有数の都へと発展させたのだ。その政治的手腕は弟である現陛下にも信頼されていて、今の国にとって無くてはならない人物であったはずだった。

そんな人物が、なぜ、このどうにもならない前線へ送られてきたのか。

彼が王太子だと知った兵士たちは皆担ぎあげたが、朋来はそんな気にはなれなかった。もともと政治手腕を奮っていた人物だ。戦争と政治は似ているようでまるで違う。彼がどうして、左遷されるようにこの戦地へ送られてきたかということが気になった。

しかし、彼が司令官に任官すると、恐ろしいほどの早さで戦況が変わった。厳しい戦況には変わりなかったが、滞りがちだった兵糧や衛生兵の配備が進んだ。次第に敗走ばかりだった戦況が攻勢に転じた。それでも兵士は足りないのです、司令官自ら武器を手に戦うこともあった。その身辺警護に、朋来は駆り出されることとなった。その司令官は、この戦地にあつて仁徳者と言われるほど温厚だと評判だったが、朋来は、彼と出会った瞬間に、鳥肌の立つ思いがした。

部下となるはずの朋来に握手を求めてきた彼は、表面上はとても人当たりのいい人格者だった。だが、その静かな双眸は、

「よろしくお願ひしますね」

ひどく酷薄な色をしていた。

「御苦勞。よく無事に連れてきてくれた」

慶諾と共に席を勧められ、朋来は彼の前に座った。

花嫁衣装がないことに気付いたあと、行程を一日早めて南概に入った。

あれ以上、あの少女を痛ぶるような事実を探しだしたくなかった。彼女を歓迎したあと、慶諾と朋来も客人として城に招かれた。

思つてもみなかつた扱いに、朋来は目の前でゆつたりと椅子に腰かけている男を見据える。

南概領主、明即。黒髪の整った顔立ちで今も緩やかに微笑んでいるが、その瞳は相変わらず酷薄で、いつも何を考えているのか分からない光を湛えている。

「銀獅子將軍と青龍將軍に守ってもらえれば、このうえない安全な旅路だつただろうがね」

真意の読めない言葉に、朋来も慶諾も答えなかつた。

彼はいつだつて何を企んでいるかわからない。

彼が、あの二年前の戦争を引き起こした張本人だ。

侵略戦の最中に普段は関わりのないはずの文官の大臣たちの動きが不審だつた。それに気付いた友人の一人が、朋来の伝手を頼つて探りを入れるように言つてきたのがきっかけで、調べていくうちにそれが明即到に繋がることを知つてしまった。

慶諾もその一人で、戦場で兵士に交じつて幾度も暗殺者に命を狙われる羽目になつたのだ。しかし、戦争が終わる頃には、明即の方が朋来たちを重用するようになって、いつの間にか取り込まれるような形で戦争を終わらせることとなつた。

しばらくその後始末にも駆り出され、きっと誰よりも、もしかすると弟である現陛下よりもこの男の酷薄で非情な面を知っているかもしれない。

「なぜ、囷に使うような真似を？」

尋ねたところでまともな答えは期待していなかつた。

だが、朋来は尋ねずにはいられず気付いたときには口にした。

「なぜ、自ら望んだ人を囷に？」

尋ねてから、朋来は口を噤んだ。

明即から微笑みが、消えた。

まるで洗い流したように感情らしい表情がすっかりと失われ、酷薄な瞳がしつくりとそれに馴染んだ。

「呆れた愚弟だ」

憎らしげに吐きだすと、息を吐きだして明即は珍しく口元を歪めた。

「大臣共にも我が愚弟にも、忠告はした。私の婚約者に手を出すような真似をすれば、二年前の程度では済まないとな」

瞼の裏で忠告した者たちを打ち殺すように目を閉じると、明即は薄く笑う。

「いつそ、滅ぼしてしまおうか。」

歪んだ口がそう紡いだのを朋来は見た。

やはり、連れてくるのではなかったのか。

逃げるようにして彼女を連れてきたが、果たしてこんな猛獣のもとで良かったのだろうか。

しかし、逆に言えば、この猛獣の足元こそが一番の安全な場所だとも言える。

この冷酷な猛獣によって、一国の趨勢と秤にかけられる彼女だからこそ。

夕食の席で会うことができた彼女は、戸惑いながらも笑っていた。何でも、明即がこの南概の領主だということも知らなかったようで、突然の結婚の申し込みに驚いているようだった。

だが、ようやく居場所を得たような顔の彼女を見て朋来は少しだけ安堵した。

「きっと、彼女なら幸せになれるだろう。」

朋来の呪いを笑い飛ばしてくれたように、その優しさで誰かを救いながら。

朋来たちが王都へ帰る時には、本当の家族と別れるような顔で少しだけ彼女は泣いた。

「マユさま」

「な、何？」

ぐずぐずと涙を流す視線に合わせてすでに癖のように腰をかがめ、手巾を渡してやると彼女は素直に受け取って鼻を噛んだ。

「幸せにおなりなさい」

きつと、養母と義妹はこんな気持ちだったのかもしれない。

この先、彼女と再び会えるかどうか分からない。

だが、遠くからでも幸せを祈っている。

そんな、温かな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153s/>

女神さま おちた

2011年8月2日00時12分発行